

井伏鱒二年譜（昭和十六年～平成八年）

松 本 武 夫

拙書、『井伏鱒二―宿縁の文学―』には、それへの関連上必要な「井伏鱒二年譜」の誕生より陸軍徴用時までの年譜を収録している。従って、本年譜は、それとの重複を避けることもあり、井伏文学にあつての重要な転機とも云い得る戦時体験の年、昭和十六年より平成八年（平成五年七月以降は没後年譜）までの年譜を提示した。

凡 例

- 一、年齢は、全て満年齢を用いた。
- 一、各月毎に、生活関連年譜を掲げ、次いで作品年表を掲げた。その区分を／で示した。
- 一、作品名は「」を、書名は「」を、雑誌及び新聞等は〈 〉を用いた。なお作品、書名、雑誌及び新聞等々の補足的説明には（ ）を用いた。

一九四一（昭和十六）年 四十三歳

一月、「小間物屋」を〈中央公論〉に、「郷土大概記」を〈文学界〉に、「増富の谿谷」を〈オール読物〉に、「青苔の庭」を〈新女苑〉（十二月）に、「ドリトル先生船の旅」（翻訳）を〈少年倶楽部〉（十七年十二月）に、「ドリトル先生のこと」を〈少年倶楽部〉に、「寒夜」を〈サンデー毎日〉（一日）に、「自序」を『さざなみ軍記』に、「あとがき」を『ドリトル先生「アフリカ行き」』に発表。翻訳『ドリトル先生アフリカ行き』を白林少年館出版部より、『さざなみ軍記』付ジョン万次郎漂流記』を河出書房より刊行。二月一日、無名時代の恩人であり、仲人でもある田中貢太郎が高知で死去する。二日、高知に向かう。／「黒い表紙の日記帳」を〈改造〉に、「借着」を〈日本の風俗〉に、「多々良紀行」を〈博浪沙〉に、「（無題）」を〈四季〉に発表。

三月十五日、阿佐ヶ谷将棋会が復活し「ピノチオ」にいく。上林暁・木山捷平・太宰治・青柳瑞穂ら十二人が集まった。／「追悼記」

を「博浪沙」に、「跋」を『シグレ島叙景』に、「あとがき」を『夏の狐（井伏鱒二随筆全集第一巻）』に、「（無題 雑信一束）」を「四季」に発表。「歳末閑居」「石地蔵」「逸題」「つくだにの小魚」「冬の池畔―甲州大正池―」「按摩をとる」が『四季詩集』（山雅房刊）に収録される。『シグレ島叙景』を実業之日本社より、『井伏鱒二随筆全集』（三巻 十月、十七年二月）を春陽堂より刊行。四月五日、太宰治と東洋館（甲府市錦町）に行く。／「五三郎君に関する記」を『文学界』に、「（無題 雑信一束の欄）」を『四季』に、「モデル供養」を『公論』に発表。

五月六日、阿佐ヶ谷将棋会が青柳瑞穂邸で催される。将棋会後、青柳瑞穂より藤原時代の壺を見せてもらい美術講義を聞く。／「風貌姿勢―小田嶽夫―」〔5〕を『四季』に、「（無題）」を『博浪沙』に発表。『一路平安（普及版）』を今日の問題社より刊行。

六月、文芸講演会の講師として亀井勝一郎、中村武羅夫、巖谷大四らと甲府・高田・上田・長岡・伊香保に講演旅行に行く。三十日、佐藤春夫夫妻の媒酌による山岸外史の結婚式並びに披露宴が鶯谷の料亭「志保原」において催され出席する。／「五月五日の日記」を『文学界』に、「全然不漁―釣った話／釣られた話―」を『読売新聞』（二十七日）に発表。『おこまさん』を輝文館より刊行。七月十六日、「ピノチオ」での第一回「水曜会」に出席。他に上林暁、太宰治、青柳瑞穂、田畑修一郎、小田嶽夫、外村繁、亀井勝一郎、木山捷平、浜野修の十名が出席した。

八月二日、「秀子の車掌さん」（『おこまさん』の映画化・出演 高峰秀子、藤原鶏太、夏川大二郎）のロケが行われる。／「対談会の記」を『文学界』に、「釣と政事と狐」を『文学界』に、「長耳国漂流記―新しい形態の長篇―」を『報知新聞』（四日）に発表。「太宰治著新ハムレット」（書評）を『都新聞』（日曜夕刊十八日）に発表。

九月、「隠岐別府村の守吉」を『オール読物』に、「訂正―旅よりの風俗―」を『日本の風俗』に発表。

十月、静岡県清水市三保へ山岸外史、亀井勝一郎、太宰治と一泊旅行をする。十日、「中島直人君追悼会」が新宿樽平で催され、谷崎精一、浅見淵、木山捷平、外村繁、宮崎聡らと集う。小田嶽夫と共に酒田市の佐藤家を訪れ、上田秋成の稿本を見せてもらい、（このことが記事として『大阪毎日新聞』二十九日付・『東京日日新聞』三十一日付に掲載される）その後、最上川で釣りをする。／「西金の渡船番」を『改造』に、「あとがき」を『山の宿（井伏鱒二随筆全集第二巻）』に、「故中島直人とタメカネ入道」を『都新聞』（朝刊二十八日～三十日）に発表。『山の宿（井伏鱒二随筆全集第二巻）』を春陽堂書店より刊行。

十一月十五日、甲府市錦町「東洋館」に小田嶽夫と共に滞在中、東京からの電話で陸軍徴用令書が来たことを知る。十七日、本郷

の区役所で徴用の身体検査を受ける。そこには阿郎知二、今日出海、海音寺潮五郎、武田麟太郎、尾崎士郎、太宰治等がいた。太宰治は肺浸潤と診断されはねられる。二十日、菊池寛主催の送別会と「文学界」主催の送別会とが開かれ、出席する。更に「ピノチオ」に於いて小田嶽夫、中村地平と三人の送別会が開かれ、出席する。帰宅後、『井伏鱒二集』（昭和十七年九月改造社刊）の自筆「年譜」を書く。二十一日、大阪の中部軍司令部に出頭のため、小田嶽夫、中村地平、寺崎浩、高見順らと共に午後九時、特急燕で東京駅を発ち大阪へ向かう。小沼丹、太宰治、亀井勝一郎らが東京駅で見送る。二十二日、大阪中央ホテルを出、九時、大阪城内に集合し、陸軍報道班員としてマレー派遣組に組み込まれ入隊する。夕方、輸送指揮官栗田中佐から軍人精神についての訓話がある。「お前たちの命は、今から俺が預かった。」「ぐずぐず云うものは、ぶった斬るぞ」というものであった。「私はこの輸送指揮官の単純な一面を借りて『遙拝隊長』という作品を書いた」（『半生記』）。二十三日、宣誓式が取り行われる。二十四日、帯刀を他の部隊の人より買い受けるが、手に合わぬため同部隊の人と交換してもらう。不用品は荻窪の自宅に送る。／「葡萄の村」（グラビヤ）を〈新女苑〉に、「上田秋成のつゞけ字」を〈東京日日新聞〉（五日、六日）に、「遊び場の子供たち」を〈国民六年生〉に発表。「無題（本年度の文学作品に関するアンケート回答）」が〈現代文学〉に掲載される。

十二月二日、九時三十分、営舎を出発し、十一時、天保山港より汽船アフリカ丸に乗船し、十二時、出港する。船内には海音寺潮五郎、中村地平、岩崎栄、小田嶽夫、小栗虫太郎、堺誠一郎、高見順、寺崎浩、倉島竹二郎、里村欣三らがいた。船中新聞「南航ニュース」（ガリ版印刷、半紙一枚、発行部数数百部）を刊行する。五日、前日より風邪をひき寝込んでいたが、倉島竹二郎の病室を見舞い、その訪問記を「南航ニュース」に発表する。八日、甲板で宮城遙拝の式が舉行される。空襲警報が発令されたが、間もなく解除。この香港沖百五十哩を南航中、大東亜戦争勃発の旨の詔勅が下ったことの通告を受ける。「ラジオでニュースを聞きながら、みんな萬歳を叫んだ。」（『南航大概記』）。十五日、メコン河の河口のサンジャック岬に到着。十九日、外出許可が降り、上陸する。二十一日、アフリカ丸は出港し、小汽船に乗りサイゴン河を下る。二十五日、再び大汽船に乗り換え、出港。二十七日、午前九時タイのシンゴラ島に到着。午後一時頃上陸し小船に乗り本部に着く。二十八日、トラックに分乗してアロルスターまで二百二十キロ走る。「湿地や草原にも砲弾の跡があつた。或る湿地に一つ大きな砲弾の跡があつて濁り水がたまり、それに水牛がつかつて頭だけ出していた。」（『南航大概記』）。三十一日、早晩、トラックに分乗し、二百五十キロを走り、タイピンに着く。ここで輸送指揮官の手を離れ一九二九部隊所属の宣伝班に入る。／「序」を『光を求めて』（金谷完治著 短編小説集）に、「倉島君の病氣」を

〈南航ニュース〉(六日)に、「あとがき」を『ドリトル先生アフリカ行き』に発表。「三宅島噴火の当日」を『山の宿(井伏鱒二随筆全集第二巻)』に初収録する。「東京のお獅子」を十六年執筆。「無題・(開戦に関するアンケート回答)」が〈南航ニュース〉(九日)に掲載される。『ドリトル先生アフリカ行き』をフタバ書院より刊行。

この年、「簪」が映画化(監督清水宏・出演 田中絹代、笠智衆、斎藤達雄、他)される。

一九四二(昭和十七)年 四十四歳

正月、留守宅の井伏家に見舞いを兼ねて、亀井勝一郎、伊馬鶴平、太宰治が年始の挨拶に訪れる。当日、井伏家の庭先で、亀井勝一郎と太宰治との二人の写真を、伊馬鶴平が撮った。

一月三日、任務別に分けられ、資料班所属となる。同じ班には、中村地平、北町一郎、栗原信らがいた。八日、随筆「沿道所見―郷土部隊に逢う―」を書く。十八日、午前九時出発、ジョホール州境のゲマスに到着する。「小さな町である。町の入口に激戦の跡、歴然としているのを見た。」(「南航大概記」)。二十一日、近所のマライ人の大泥棒と知合いになる。ジミー・ネルソンとその乾分一家である。俠気ある盗賊だということで、誰かがネズミ・ボーイという仇名を付ける。二十八日、ゲマスからクルーアンまでトラック並びに自動車で百二十キロ行軍する。途中、すべての橋梁が爆破されていた。

この一月、田中貢太郎記念碑建設会発足し、発起人の一人として登録される(昭和十八年七月、佳浜に田中貢太郎記念碑が建てられた)。／「マレー人の姿」を九日執筆。「沿道所見―郷土部隊に逢ふ―」を〈建設戦〉に発表。『一路平安』(有光名作選集14)を有光社より、『風貌姿勢(井伏鱒二随筆全集第三巻)』を春陽堂書店より刊行。

二月十二日、ジョホール・バールに着く。十四日、終日砲声を聞く。徴用員・故柳重徳の告別式が挙行される。故人は二月十二日、ブキテマ三叉路の近くで壮烈な戦死をとげ、遺骨が帰って来る。十五日、「記念すべき吉日である。シンガポール陥落。午後七時十五分、敵は無条件降伏。内地のみんなの喜びが直ぐ近くまで追いかけて来ている。」(「南航大概記」)。十六日、シンガポールに到着。このシンガポールには、二月十六日から二十三日の間、山下奉文司令官の「華僑の検問」が発せられた。引続き三月一日まで第二次検問が行われる。十八日、命令によって、原君を先頭にして市内のストリート・タイムズ新聞社に行く。十九日、ストリート・タイムズ新聞社の以前の事務員、記者、編集者などが宿舎に来る。「新しく出す新聞を昭南タイムズと名づけたい」という、

原君の意見でそのように決まる。二十日、英字新聞「昭南タイムズ社」に行く。通訳の古山力と相談し、ラジオ・ニュースを一ページ分、地方ニュース四分の三ページとする。日本語講座の欄を設け、広告は少なくし、他は布告発表とする。定価は五銭。R. Prakasという変名で編集兼発行人として勤務することとなる（井伏鱒二が退職後も、R. Prakasの名義が使用される）。社員は六十人ほどであった。土曜版には、献納画を描くためにシンガポールに来ていた藤田嗣治のスケッチ画を載せたこともあった。二十日、英字新聞〈THE SHONAN TIMES〉が創刊される。日本軍司令官・山下奉文の布告が掲載された。二十一日、長兄文夫、肺炎により急逝する（享年四十七歳）。

三月十三日、「今朝、細雨。辻政信参謀の敵側から見たマライ戦話があつた。」（「南航大概記」）。十七日、中島健蔵、神保光太郎と同室になる。／「敵弾が作った池のほとりにて」を〈写真週報〉に発表。

四月、「アバカとの話」を〈モダン日本〉に発表。

五月、神経衰弱に陥り、〈昭南タイムズ〉を辞職する。その後、神保光太郎が開校（五月一日）した昭南日本学園に勤務する。生徒数は三百四十人ほどであった

六月十八日、午前中に昭南日本学園の歴史講義用のノートをつくり、昼ごろ事務所に出る。このころから現地人に日本歴史の講義をする。日本人小学校で使用していた「日本歴史」をテキストにして井伏鱒二が読むのを通訳が英語に訳した。「週一回現地人小学校の校長さんや教頭などが、学校の帰りに聴講に来るのです。マレー人が十人ぐらい、印度人が十五人ぐらい。ほかに日本語を覚えたい現地人が十人ばかり来ていました。」（「文学・昭和十年代を聞く」）。／「序」を『釣趣戯書』（三省堂刊 佐藤垢石著）に、「昭南市の大時計」を〈東京日日新聞〉（二十七日）に、「親子かうもり」を〈週刊少国民〉（二十八日）に発表。「アバカとの話」「マレー人の姿」が『大東亜戦争 陸軍報道班員手記マレー電撃戦』（大日本雄弁会講談社刊）に収録される。

七月三日、ブキテマ三叉路の近くで壮烈な戦死をとげた「陸軍懲員 柳重徳之墓」を墓参し、帰りに二葉亭の碑をたずねる。碑面には「二葉亭四迷終焉之碑、默南書」と刻んである。八日、生家からの手紙が届く。永井龍男からの手紙も受け取る。「強くなれ強くなれと書いてあつた。そうありたいものだと思う。」（「昭南日記」）。

八月、シンガポールで長兄の急逝（昭和十七年二月死去）したことを知る。シンガポールでは、土曜・日曜にはよく釣りをしたり、映画（チャップリンの「独裁者」や「風と共に去りぬ」や「秀子の車掌さん」〈井伏鱒二原作『おこまさん』の映画化・監督成瀬巳

喜男 出演 高峰秀子、藤原鶏太、夏川大二郎等を見たりもした。／「南方の文化建設を語る座談会〔1〕」を〈読売報知新聞〉(五日)に、「南方の文化建設を語る座談会〔2〕」を〈読売報知新聞〉(六日)に、「南方の文化建設を語る座談会〔3〕」を〈読売報知新聞〉(七日)に、「南方の文化建設を語る座談会〔完〕」を〈読売報知新聞〉(八日)に、「作者の言葉」(「花の街」)を〈東京日日新聞〉〈大阪毎日新聞〉(十三日)に、「花の街」を〈東京日日新聞〉〈大阪毎日新聞〉(十七日～十月七日)、『花の町』初収録の際「花の町」と改題)に発表。

九月、「昭南日記」を〈文学界〉(後『マライの土』〈作家部隊随筆集〉に収録)に、「解説」を『井伏鱒二集』〈新日本文学全集10〉に、「略歴」を『井伏鱒二集』〈新日本文学全集10〉に、「昭南風物」を〈都新聞〉(朝刊一日～七日)に、「サザエトフカ」を〈サクラ〉(二十一日?)に発表。『井伏鱒二集』〈新日本文学全集10〉を改造社より、詩集『仲秋明月』を地平社より刊行。

十一月二十二日、徴用解除となり、飛行機で帰国。杉並区清水町に帰宅する。飛行機に乗るのはこの時が最初で最後であった。

「マレーの文化と文学①(座談会)」を〈西日本新聞〉(五日)に、「マレーの文化と文学②(座談会)」を〈西日本新聞〉(七日)に、「マレーの文化と文学③(座談会)」を〈西日本新聞〉(八日)に、「マレーの文化と文学④(座談会)」を〈西日本新聞〉(九日)に発表。『星空』を昭南書房より刊行。「座談会・南方文化建設の一年―昭南で成果を語る我が文化戦士― 井伏鱒二・寺崎浩・海音寺潮五郎・中村地平・小栗虫太郎・北町一郎・荒木巖・神保光太郎・塚本国太郎・小出秀男」が〈東京日日新聞〉(朝刊二十八日)に掲載される。

十二月、太宰治と熱海に遊ぶ。

「三つのともしび―伏見稲荷神社に参拝して―」を〈東京日日新聞〉(夕刊二十三日)に発表。

一九四三(昭和十八)年 四十五歳

一月、「国運照らす三つのともしび―伏見稲荷神社に参拝して―」を〈セレンベス新聞〉(朝刊三十日)に、「ゲマスからクルーアンへ」を〈文藝春秋〉に、「十七年七月下旬ころ」を〈文学界〉(『井伏鱒二全集十巻』に初収録の際「十七年七月下旬頃」と改題)に、「昭南タイムズ発刊の頃」を〈サンデー毎日〉(十七日)、『井伏鱒二全集十巻』に初収録の際「昭南タイムズ発刊の頃」と改題)に発表。

二月、「旅館・兵舎」を〈時局情報〉に、「マライの禁札」を〈東京新聞〉（朝刊十六日～十八日）に発表。「対談 最近南方みやげ話」（対談 井伏鱒二・大木惇夫）が〈家の光〉に掲載される。

三月、「或る少女の戦争日記（一）」を〈新女苑〉に、待避所を〈文学界〉に連載する（六月続載）。「昭南日記」が『作家部隊随筆集 マライの土』（新紀元社刊）に収録される。「新生マライを語る―帰還報道班員座談会―中島健蔵・堺誠一郎・井伏鱒二・佐山忠雄・神保光太郎―」が〈知性〉に掲載される。「朗読文学」を〈日本読書新聞〉（二十七日）に発表。

四月、二十九日、塩月起の結婚式に節代夫人と共に出席する。／「或る少女の戦争日記（二）」（後『井伏鱒二全集十巻』に初収録の際「或る少女の戦時日記」と改題）を〈新女苑〉に連載する。

五月、情報局の命令により、甲府・諏訪・高田・上田に講演旅行に行く。／「紺色の反物」を〈改造〉に、「マライ・昭南の出版物（上）―戦塵の中から―」を〈朝日新聞〉（八日・東京本社）に、「マライ・昭南の出版物（下）―床しい兵士の歌―」を〈朝日新聞〉（九日・東京本社）に、「ひかげ池」を〈中部日本新聞〉（十三日～七月三十一日）に発表。「建設戦―昭南の陣中新聞1」を〈朝日新聞〉（マライ・昭南の出版物（上）―戦塵の中から―）と同文（二十日）に、「兵士の歌―昭南の陣中新聞『建設戦』2」（マライ・昭南の出版物（下）―床しい兵士の歌―）と同文）を〈朝日新聞〉（二十一日）に、「昭南の商店街―南方巷談―」を〈発展春季号〉に発表。

六月、「借衣」を〈オール読物〉に発表。「御神火」を〈週刊少国民〉に八回連載（十三日～八月一日）する。「待避所」を〈文学界〉に連載する。「燕巢」を〈文学建設〉に、「邂逅」を〈週刊毎日〉（二十七日）に、「来週からの連載物語」を〈週刊少国民〉（六日）に発表。

七月、第十七回直木賞より直木賞選考委員となり、芝公園「浪花」に於いて、吉川英治・大仏次郎・岩田豊雄・浜本浩・中野実の委員と共に選考を行う。以降、昭和三十二年下半期まで直木賞選考委員を勤める。甲府市の「梅ヶ枝旅館」で、水門町からくる太宰治と集う。その折に集団疎開の東京目黒の小学生（「二つの話」のモデル）と出会う。田中貢太郎記念碑設立の発起人の一人であったが、その田中貢太郎記念碑が佳浜に建てられる。

八月、「わが郷土讃」を〈婦人公論〉に発表。

九月、「直木賞銓衡感想」を〈文藝春秋〉に、「桃葉先生の碑」を〈読売新聞〉（十七日、十八日）に発表。「猿」が『十年』（二見書

房刊)に収録される。

十月、「吹越の城」を〈文芸読物〉に、「桃葉先生之碑」を〈博浪沙〉に、「防諜」を〈理想日本〉(七日)に発表。

十一月二十三日、三男、昇三誕生。／「三宝洞」を〈新緑〉に発表。

十二月二十三日、「阿佐ヶ谷会錬成忘年会」と名付け、太宰治、青柳瑞穂、安成二郎、木山捷平らが埼玉県の高麗神社を参拝した。持ち回りの幹事であったが参加できなかった。／「布山六風」を〈文学界〉に、「その一例」を〈知性〉に、「序」「南航大概記」を『花の町』に発表。『花の町』を文藝春秋社より刊行。『無題』(本年度感銘を受けた作品等のアンケート)が〈文芸〉に、『無題』(新人の作品に関するアンケート)が〈文学報国〉に掲載される。

一九四四(昭和十九)年 四十六歳

二月、文学報国会から派遣され、島根県の塩津浦に出征軍人の模範的留守家族を訪ね、さらに、沢谷村の農村に傷痍軍人を訪ねて訪問記を書き、後に「川谷ハル女」・「村長」として発表する。／「シ港陥落前後―固き共栄圏の環3―マライ」を〈東京新聞〉(朝刊二日)に発表。

三月、「便乗紀行」を〈文芸読物〉に、「直木賞選評」を〈文藝春秋〉に、「情感の故郷」を『定本 小波世界お伽話』月報に、「二人の才媛」を〈祖国日本〉に発表。『御神火』を甲鳥書林より刊行。

四月十四日、中村地平の帰郷送別会に太宰治、上林暁、木山捷平、小田嶽夫等と出席する。／「捕虜の印度兵」が『新生南方記』(中村武羅夫編 北光書房)に収録される。「倍增産も義足から―傷痍の身で表彰の島根県沢谷村藤原武夫君―」を〈週刊朝日〉(二十三日)に発表。

五月、山梨県甲運村で瓦工場を営む岩月由太郎家の離れにある、岩月久満(祖母)の隠居所の一階に、節代夫人と四人の子が疎開する。隠居所は、瓦葺き、総桧造りの二階建て、入居した一階には八畳一間と六畳三間があった。二階に住む久満おばあさんは面倒見がよく、「食料がなくて大変な時期だったけれど、久満さんの後ろについて近所を回ると、久満さんの顔でいろいろな食べ物が手に入るの助かった」(節代夫人)。

六月二十五日、午前中に「津軽」を百枚書き上げた太宰治が、午後、甲府市東の甲運村酒折に疎開中の井伏鱒二を訪ねてくる。／

「村長」を〈文藝春秋〉に、「川谷ハル女」を〈家の光〉に、「昭南所見」（詩のち「シンガポール所見」と改題）を〈四季〉に、「昭南日本学園」を〈中学生〉に、「銭湯の策」を〈毎日新聞〉（朝刊25日）に発表。

七月、井伏鱒二も山梨県甲運村の岩月家に疎開する。空き家となる荻窪の家を岩月家の息子岩月英男に貸すことになる。甲運村に疎開後も、地域の防空演習などのための男手が必要となり、井伏鱒二はたびたび一人で上京する。／「旅客と駅手」を〈交通東亜〉（1日）に、「防火用水」（のち「防火水槽」と改題）を〈文藝春秋〉に、「鼠ボーイ」を〈少國民の友〉に発表。

八月五日、疎開先に中島健蔵等が訪れ、太宰治、伴俊彦らと共に甲府城跡側の旅館「梅ヶ枝」で小宴を開き葡萄酒を飲む。中島健蔵が太宰治を「貴様」と呼んだのがもとで喧嘩となる。／「マライ人の赤んぼ」を〈銃後の大阪〉に発表。

九月、「山上陣地」を〈新若人〉に発表。

秋、芥川賞受賞者である小尾十三に招待されていた、同賞の選考委員、横光利一と共に酒折を訪ねる。

十一月、童話「九百三十高地」を『少國民の友』に連載（二十年二月）。「昭南所見」を〈大東亜文学〉に発表。

十二月、「冷凍人体」（「頓生菩提」のち「冷凍人間」と改題）を〈大東亜文学〉に発表。

一九四五（昭和二十）年 四十七歳

三月、「疎開者を迎へるの記」を〈東京新聞〉（朝刊十八日）に発表。

四月、甲府の石原家に疎開してきた太宰治と頻繁に交遊するようになる。十一日、甲府の「梅ヶ枝」で太宰治と小山清との三人の席で小山初代の死（昭和十九年七月二十三日、中華民国山東省青島市で病没。享年三十三歳）を伝える。

六月、「里村君の絵」を〈文芸〉に発表。

七月六日、夜半から七日未明にかけて、甲府が米軍機B29の編隊による爆撃を受ける。八日、太宰治と出会い、郷里福山への切符を受け取る。九日、家族全員で甲府を立ち郷里に向かう。「荻窪から」疎開させていた「備前焼の壺」一つだけをリックに詰め、次男の大助に背負わせていました」（節代夫人）。大阪が空襲をうけたと聞き、京都から山陰線で福山へ向かい、鳥取のホームで野宿をする。十日、二十八時間かけて広島県加茂村栗根の郷里に到着する。再疎開である。／「疎開日記」（後に『牡丹の花』〈井伏鱒二選集 第七巻〉に収録）を執筆する。

八月、終戦直後の福山を訪れ、そこでカキツバタの狂い咲きを見る。／「昭南所見」(序詩)を『火樹ひらく』(寺崎浩著・新太陽社刊)に改稿再録する。

十月、『丹下氏邸』を新潮社より刊行。

一九四六(昭和二十一年) 四十八歳

二月、『契約書』を〈文藝春秋 別冊〉(五月に続載)に発表。

三月、『雨の歌』を飛鳥書店より刊行。

四月、『経筒』を〈新生〉に、「二つの話」を〈展望〉に発表。『ドリトル先生「アフリカ行き」』(ロフティング・井伏鱒二訳)を光文社より刊行。

五月、『波高島』(「侘助」の前半)を〈改造〉に発表。『詩集 仲秋明月』(手帖文庫)を地平社より刊行。

六月、『侘助』(「侘助」の後半)『波高島』の続編として読んで頂きたい」と文中にある)を〈人間〉に発表。

七月、『オロシャ船』を新星社より、『雞肋集』を鷲の宮書房より刊行。

九月、亀井勝一郎・浅見淵・上林暁・瀧井孝作等の同人雑誌〈素直〉に坪田譲治・尾崎一雄・外村繁・太宰治・中谷孝雄・小田嶽夫らと共に参加し、「追剥の話」を同誌に発表。

十月、満州から引揚げてきていた木山捷平の歓迎会を古川洋三宅(岡山県笠岡)で開く。／「防火水槽」が『昭和十九年二十年度』〈日本小説代表作全集13〉(小山書店)に収録される。『まげもの』〈現代文学選20〉を鎌倉文庫より刊行。

十一月、『橋本屋』を〈世界〉に、「当村大字霞ヶ森」を〈中央公論〉に発表。『多甚古村』を札幌青磁社より刊行。

十二月、『侘助』を鎌倉文庫より、『風貌姿勢』を三島書房より刊行。

一九四七(昭和二十二年) 四十九歳

一月、笠岡で会が開かれ、小山祐士・村上菊一郎・藤原審爾・古川洋三らに会う。／「引越やつれ」を〈新潮〉(十二月・諸誌に連載)に、「夏まつり」を〈社会〉に、「魚拓」(詩)を〈アサヒグラフ〉に発表。

二月、三原で親睦の会が開かれ、小山祐士・村上菊一郎・大江賢次・藤原審爾・木下夕爾・古川洋三・木山捷平らに会う。／『夏の狐』を三島書房より刊行。

三月、岡山県倉敷の藤原審爾邸を村上菊一郎・赤松月船・木山捷平らと共に訪ね、倉敷美術館を訪れる。／「兎の仔」を〈花〉に、「風貌・姿勢―武田麟太郎氏のこと―」（後に「タケリンさん」と改題）を〈文藝春秋〉に発表。「勉三さん」が『蘭夢抄』（昭森社）に収録される。『ジョン万次郎漂流記』（金子尚一英訳）が日英文化協会より刊行される。

四月、「かすみ」（詩）を〈朝日評論〉に発表。『追刺の話』（現代作家選4）を昭森社より、『ジョン万次郎漂流記』（国立選書）を国立書院（文学界社刊の定価と装幀を変えた異装本もある）より刊行。

七月、笠岡文人会に小山祐士・村上菊一郎・木山捷平らと出席する。東京清水町の自宅に帰る。／「高田館」（『引越やつれ』の一部）を〈新潮〉に発表。

八月、「手紙のこと」を〈日本小説〉に、「鮑つり」を〈日本読書新聞〉に発表。

九月、「牛込鶴巻町」（『引越やつれ』の一部）を〈展望〉に発表。

十二月、「果林館」（『引越やつれ』の一部）を〈文体〉に、「鬼子母神裏」（『引越やつれ』の一部。後年脚色して「掏摸の浅三郎」として発表）を〈人間〉に、「悪夢」を〈文壇〉に発表。

一九四八（昭和二十三年） 五十歳

一月、太宰治夫妻が年始の挨拶に訪れる。／「因ノ島」を〈文藝春秋〉に、「牛泥棒」を〈サンデー毎日〉に、「疎開記」を〈文学界〉に、「上林暁」を〈群像〉に、「中島健蔵氏のこと」を〈オール読物〉に、「峠の雪の朝」（詩）を〈文壇〉に発表。『山椒魚』（新潮文庫『夜ふけと梅の花』と書名変更した文庫もある）を新潮社より刊行。

二月、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、青柳瑞穂、外村繁、上林暁、亀井勝一郎、原二郎、安成二郎等と集う。青柳瑞穂との持ち回りの幹事であった。／「文壇親交録」を〈小説新潮〉に発表。

三月、「山峡風物誌」を〈改造〉に、「黒い蝶」（詩）を〈文藝春秋〉に発表。『井伏鱒二選集』（全九巻、昭和二十四年九月完結）を筑摩書房より刊行。

四月、「裁趣」を〈文芸読物〉に、「阿佐ヶ谷時代の横光氏のこと」を〈人間美学〉に、「疎開余録」(詩)を〈サンデー毎日〉に発表。「新人を語る―新人小説詮衡委員座談会 丹羽文雄・川端康成・井伏鱒二・青野季吉・平林たい子」(井伏は誌上参加)が〈群像〉に掲載される。

五月、「茗荷屋」を〈光〉に、「新さんの話」を〈オール読物〉に、「杠志子」を〈婦人画報〉に、「牡丹の花」を〈中央公論〉に、「歌碑」(詩)を〈丹頂〉に、「蛙」(詩)を〈アサヒグラフ〉(二十六日)に、「しびれ池のカモ」を〈毎日小学生新聞〉(十一日)九月二十一日)に発表。『引越やつれ』を六興出版部より、『詩と隨筆』を河出書房より刊行。「集金旅行」が『現代日本文学選集6』(細川書店)に、「追剥の話」が『日本小説代表作全集15』(小山書店)に収録される。

六月十九日、早朝、山崎富枝と心中した太宰治の遺体が玉川上水から上がる。二十日、通夜。二十一日、太宰治の告別式が三鷹の太宰宅で行われ、葬儀副委員長として列席する。葬儀委員長の豊島与志雄のほか、亀井勝一郎、伊馬春部、林美美子、古田渥、今官一、小田嶽夫、外村繁、上林暁、丹羽文雄、渋川饒、田中英光、青柳瑞穂、小山清、石川淳、小山清、宮崎讓、山岸外史など、約三百人が参列する。／「復員者の噂」を〈社会〉に、「タムリン夫妻」を〈婦人〉に、「惜別」を〈日本読書新聞〉(三十日)に、「春宵」(詩)を〈詩学〉に発表。

七月十日、阿佐ヶ谷会に出席する。「横光利一賞規定」が改造社より発表され、川端康成、小林秀雄、橋本英吉、林美美子、中山義秀、河上徹太郎と共に銓衡委員となる。三十一日、伊馬春部・今官一らと共に、太宰治の『傾陽』に関する件で、そのモデルとなった太田静子を小田原下曾我に訪ねる。／「勘三さん」(詩)・「蛙」(詩)を〈八雲〉に発表。

八月一日、小田原下曾我の尾崎一雄を伊馬春部・今官一らと共に見舞う。／「バベの木かげ」を〈作品〉に、「不漁雜記」を〈文学界〉に、「太宰治のこと」を〈文藝春秋〉に、「おいしい人 太宰君のこと」を〈新文学〉に、「太宰治の死」を〈ホープ〉に、「菊池・横光・太宰の想ひ出新盆を迎えて」を〈新大阪新聞〉(夕刊三日)に、「菊池・横光・太宰の想ひ出新盆を迎えて―中―」を〈新大阪新聞〉(夕刊四日)に、「菊池・横光・太宰の想ひ出新盆を迎えて―下―」を〈新大阪新聞〉(夕刊五日)に発表。書き下ろし長編『貸間あり』を鎌倉文庫より刊行。

九月、「白髪」(のち「白毛」と改題)を〈世界〉に、「かの子と真沙子」を〈サンデー毎日〉(十二月)に、「丹下氏邸」が『現代文学代表作全集5』に収録される。

十月、亀井勝一郎・山岸外史らと共に米沢に講演に行く。／「婦人客」を〈モダン日本〉に、「亡友―鎌滝のころ―」を〈別冊風雪〉に、「恐るべき風月老人」を〈書評〉に、「私の鳥籠」を〈小説界〉に発表。

十一月、「雀」を〈明日〉に、「十年前頃―太宰治に関する雑用事―」を〈群像〉に発表。「文芸閑談―座談会 瀧井孝作・上林暁・井伏鱒二・川端康成―」が〈社会〉に掲載される。

十二月、横光利一の一週忌の集まりに、中島健蔵・亀井勝一郎らと共に出席する。／「私の万年筆」を〈文芸読物〉に、「阿部一族」について」を〈心〉に発表。『シビレ池のかも』（梶文庫10）を小山書店より刊行。

一九四九（昭和二十四）年 五十一歳

一月、河盛好蔵に伴われて志賀直哉を熱海に訪ね、夜遅くまで語り合う。／「虎松日誌」を〈苦楽〉に、「隣人」を〈文芸往来〉に発表。

二月、「芳村氏の饒舌」を〈別冊 文芸春秋〉に発表。『ドリトル先生航海記』（〈世界名作全集〉）ロフティング・井伏鱒二訳を講談社より、『かんざし』を近代出版社より刊行。

三月、この年初めての阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、木山捷平・浅見淵・巖谷大四・中野好夫・中島健蔵・古谷綱武・臼井吉見・小田嶽夫・河盛好蔵・外村繁・亀井勝一郎ら等と集う。／「立候補勧誘」を〈展望〉に、「韭崎にて」を〈文学界〉に発表する。

四月、「懷中電氣」（のちに「懷中電灯」と改題）を〈新小説〉に、「自画像―苦渋あり―」を〈群像〉に発表。

五月、「普門院さん」を〈改造文芸〉に、「重い土産」を〈展望〉に、「点滴」を〈素直〉に発表。

六月一日、田名で瀧井孝作・島村利正・と解禁の鮎を釣る。桜桃忌が三鷹禅林寺で催され、浅見淵・小田嶽夫・亀井勝一郎らと共に出席する。／「雨河内川」を〈文学界〉（五月二日執筆）に、「パイア」を〈文芸往来〉に、「怪我をした記憶」を〈アサヒグラフ〉に、「森鷗外に関する挿話」を『森鷗外選集』月報（東京堂）に発表。

七月、戦後初の直木賞選考が行われ、久米正雄・大仏次郎・獅子文六・小島政二郎・川口松太郎・永井龍男らの選考委員と共に選考を行う。／「菟集品」を〈早稲田文学〉に発表。

八月、「本日休診」を〈別冊文藝春秋〉（十二月・二十五年三月・五月）に連載発表。

九月、「羽織」を〈風雪〉に、「因ノ島」を〈別冊八雲〉に発表。『試験監督』を文藝春秋新社より刊行。

十月六日、阿佐ヶ谷会が開催され、上林暁、河盛好蔵と持ち回りの幹事をつとめる。

秋、谷崎精二を囲む第一回「竹の会」が喫茶店「早稲田文庫」で開かれ、青野季吉・木山捷平・浅見淵・保高德蔵・小田嶽夫・村上菊一郎・小沼丹・(尾崎一雄は病欠)らと共に出席する。この会はこれ以降約十年ほど続き、後に上林暁・新庄嘉章・火野葦平・巖谷大四・三浦哲郎らが加わる。／「普門院さん」を〈別冊八雲〉に、「マリア観音」を〈文学界〉に、「無智無能」を〈作品〉に、「満身瘡痍」を〈新潮〉に、「爺さん婆さん」を〈群像〉に、「鶯の巣」を〈文芸読物〉(十・十一月合併号)に、「太宰の背景を語る」を『太宰治集』(上巻解説 新潮社)に、「埋草」を『横光利一全集』月報第十七号(改造社)に発表。「掘り出しもの」を十月執筆。十一月、「植木鉢」を〈改造文芸〉に発表。十二月、「をんなごころ」を〈小説新潮〉に発表。「グダリ沼」をこの年執筆。

一九五〇(昭和二十五)年 五十二歳

一月、文人将棋大会が築地京蘇苑において〈サンデー毎日〉主催で開かれ、出席する。／「酸っぱいにほい」を〈風雪〉に、「田中英光氏の印象」を『田中英光選集』月報第1号(月曜書房)に発表。

二月、「遥拝隊長」を〈展望〉に、「鳥の巣」を〈新潮〉に発表。

三月、「郁達夫」を〈世界春秋〉に、「釣魚雑誌」を〈つり人〉に発表。

四月、第二十二回直木賞選考会が銀座「岡田」で行われ、久米正雄・大仏次郎・獅子文六・小島政二郎・川口松太郎・永井龍男らの選考委員と共に選考を行う。／「尾呂村のお婆さん」を〈文学界〉に、「いやな思ひ出」を〈雄鶏通信〉に、「お島の存念書」(一〇二十六年七月・諸誌に断続三回連載)を〈小説公園〉に発表。「本日休診」が『創作代表選5』(講談社)に収録される。

五月、「本日休診」その他により第一回読売文学賞小説賞を受ける。詩歌賞は草野心平であった。阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、木山捷平・中島健蔵・小田嶽夫・河盛好蔵・外村繁・亀井勝一郎・上林暁等と集う。／「丑寅爺さん」を〈中央公論〉に、「仲人」を〈新小説〉に、「片捧かつぎ」を〈サンデー毎日〉(増刊号)に、「南部紀行」を〈読売評論〉に、「中村武羅夫さんのこと」を〈馬酔木〉に、「迂闊なこと」を〈群像〉に、「ヴィヨンの妻」を『現代日本小説大系』月報第18号(河出書房)に発表。「本日休診」

が『現代小説代表選集6』（光文社）に収録される。

六月、永井龍男の「朝霧」（『文学界』昭和二十四年八月）の「横光利一賞」受賞式に正宗白鳥らと出席し祝う。津島文治の招きにより津軽を訪れ、南部を回り、帰りに酒田に寄る。／「永井の会」を『文芸読物』に、「松ぐみ」を『人間』に、「神近市子女史」を『小説新潮』に、「四月十五日記」を『三田文学』に発表。『本日休診』を文藝春秋新社より、『多甚古村・貸問あり・普門院さん』（現代長編小説全集15）を春陽堂より、『井伏鱒二集』を新潮社より刊行。「プールの森」が『六年の童話』（童話教室・実業之日本社）に収録される。

七月、「支離滅裂」を『新潮』に、「まねごと」を『オール読物』に、「物売り二題」を『改造』に発表。

八月、「七月二日記―太宰君の手紙に就て―」を『文藝』に、「七月六日記」を『文学界』に発表。

九月、「見合ひ」を『世界』に発表。『掘り出しもの』を創元社より、『井伏鱒二・中山義秀・平林たい子・阿部知二』（現代日本小説大系別冊2）を河出書房より刊行。「文士従軍―座談会 井伏鱒二・今日出海・中山義秀・横山隆一・大宅壮一」が『日本評論』に掲載される。「因ノ島」「白毛」「遙拝隊長」が『井伏鱒二・中山義秀・平林たい子・阿部知二』（現代日本小説大系別冊2）（河出書房）に、「おじどうさま」が『くもの軽業師』（日本童話名作選集別巻3）（三十書房）に収録される。

十月、「母校」を『別冊文藝春秋』に発表。「放談八題―座談会 井伏鱒二・小林秀雄・硯伊之助―」が『群像』に掲載される。「集金旅行」「青ヶ島大概記」が『井伏鱒二・尾崎一雄・林芙美子・上林暁・伊藤整・坪田譲治』（現代日本小説大系52）（河出書房）に、「遙拝隊長」が『創作代表選集6』（講談社）に収録される。

十一月、「兎小屋の客人」を『中央公論文芸特集』に、「牧野信一のこと」を『文学界』に、「九月三日記」を『文藝春秋』に発表。十二月、谷崎精二還暦祝賀会が新宿「中村屋」で催され、浅見淵・伊藤整・井上靖・丹羽文雄・広津和郎・尾崎一雄・木山捷平・小田嶽夫・小沼丹らと共に出席する。／「柿の芽」を『ニューエイジ』に、「放火事件」を『別冊文藝春秋』に、「男やもめ」を『オール読物』に発表。『ジョン万次郎漂流記』（新児童文庫）を三十書房より刊行。

一九五一年（昭和二十六年） 五十三歳

一月、「吉凶うらなひ」を『新潮』（二月と十月に続載）に、「系図」を『サンデー毎日』に発表。

二月、「爛徳利」を〈芸術新潮〉に、「引光寺」を〈日本及日本人〉に発表。

三月、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、亀井勝一郎、上林暁・木山捷平・中島健蔵・小田嶽夫・河盛好蔵・外村繁・青柳瑞穂・浅見淵・村上菊一郎・原二郎、白井吉見、古谷綱武、中野好夫等と集う。中国料理店「ピノチオノ」(佐藤春夫の翻訳「ピノチオノ」よりとった)の店主である永井二郎(永井龍男の次兄)が料理の腕を振るった。／「霜焼けと『鳥エイサ』」を〈オール読物〉に、「パイプについて」を〈改造〉に発表。

四月、「引札」を〈文学界〉に、「折々草紙―二月十七日記」を〈群像〉に、「気になる話」を〈小説新潮〉に、「お島の語る秋帆先生」(「お島の存念書」の一部)を〈小説公園〉に、「加山君のこと」を〈中央公論〉に発表。『遙拝隊長』を改造社より刊行。

五月十三日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、〈週刊朝日〉が取材にくる。／「夜番」を〈別冊文藝春秋〉に、「アスナロの木」を〈婦人画報〉に、「つらら」を〈旅〉に発表。

六月、「風貌姿勢」を〈小説新潮〉に、「カキツバタ」(のち「かきつばた」と改題)を〈中央公論文芸特集〉に、「植庄から貰った犬の仔」(のち「犬の仔」と改題)を〈展望〉に発表。『ドリトル先生アフリカゆき』(ロフティン・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)を岩波書店より刊行。

七月、「いびつな群像」を〈新潮〉に、「断金隊」を〈文学界〉に、「岡部の陣屋」(「お島の存念書」の一部)を〈オール読物〉に、「あの頃の演劇青年」を〈演劇〉に発表。『時代の花束』を東方社より刊行。

八月、「犠牲」を〈世界〉に、「煙霞苦渋」を〈小説新潮〉に、「比波良の漁師」を〈別冊文藝春秋〉に発表。

九月、「貧乏性」を〈文芸〉に、「木砲隊始末記」を〈サンデー毎日〉(新秋号)に、「眼鏡」を〈日曜日〉に発表。『本日休診』(改定新版)を文藝春秋新社より刊行。

十月七日、阿佐ヶ谷会が催される。瀧井孝作持参の鮎を食する。／『集金旅行・さざなみ軍記』(創元文庫)を創元社より刊行。十一月、「味淡」を〈文藝春秋〉に発表。『厄除け詩集』を木馬社より刊行。

十二月九日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、小田嶽夫、木山捷平等と出席する。／「ワサビ盗人」を〈オール読物〉に、「用語の矯正」を〈言語生活〉に発表。『かきつばた』(昭和 newName 作選)を池田書店より刊行。この年「画学生旅に出る」を〈週刊朝日〉(春季増刊号)に発表。

一九五二（昭和二十七年）年 五十四歳

一月、「丸木橋」を〈新潮〉に、「樟脳の粉」を〈早稲田文学〉に、「変易不易」を〈別冊文藝春秋〉に、「うぐひす」を〈読売新聞〉（一日）に発表。『吉凶うらなひ』を文藝春秋新社より、『ドリトル先生のサーカス』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）を岩波書店より、『厄除け詩集』（限定版）を木馬社より刊行。

二月、『本日休診』が「松竹」で映画化（渋谷実監督・出演 佐田啓二、柳永二郎）される。／「二つの像」を〈心〉に、「京見物」を〈オール読物〉に、「河川状況」を〈東京新聞〉（二十九日）に発表。『ドリトル先生航海記』（世界名作全集24）ロフティング・井伏鱒二訳）を講談社より刊行。

三月、阿佐ヶ谷会が開かれる。／「鼠小僧」を〈文藝春秋〉に、「支離滅裂―わが青春3―」を〈小説新潮〉に、「湯河原沖」を〈財政〉に発表。

四月、文藝春秋新社主催の講演会で北九州を回る。その帰りに河上徹太郎・三好達治との三人で山口県西北部（川棚・萩・山口・岩国）の小旅行をする。岩国では河上徹太郎の郷里の実家に宿泊する。／「人影」を〈文学界〉に、「口髭」を〈文芸〉に、「乗合自動車」を〈別冊文藝春秋〉に発表。

五月、「再会」を〈改造〉に、「鐘つき男」を〈小説新潮〉に、「薬師堂前」を〈オール読物〉に発表。『井伏鱒二他集』（現代日本小説大系45）を河出書房より刊行。六月一日、甲府・湯村温泉の常磐ホテルで、文芸春秋新社の社員総会を蝕ねた懇親会が開かれ、井伏鱒二・久保田万太郎、瀧井孝作、中島健蔵、舟橋聖一、水原秋桜子ら文壇からも多くの作家たちが招待される。十五日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、外村繁、臼井吉見が幹事をつとめる。火野葦平が新会員となる。／「サイカチの木」を〈サンデー毎日〉に発表。随筆集『川釣り』（岩波新書）を岩波書店より、『ドリトル先生の郵便局』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）を岩波書店より刊行。

七月、御坂峠へ小沼丹・吉岡達夫と訪れる。／「晩春の旅」を〈新潮〉に、「長崎の醤油瓶」を〈文学界〉に、「追憶の記」を〈文藝春秋〉に、「三人旅の記―防長行脚―」（山口から岩国まで）分担執筆）を〈群像〉に発表。「文学者の見た十年間―座談会 井伏鱒二・奥野信太郎・亀井勝一郎・河盛好蔵・坂口安吾・火野葦平―」が〈新潮〉に掲載される。

八月、「木山捷平を激励する会」を、河盛好藏・浅見淵と共に発起人となり、新宿「樽平」で催す。巖谷大四・小田嶽夫・外村繁・亀井勝一郎・小沼丹等が出席する。／「猫また小路」を〈週刊サンケイ〉(五日〜十二月二十八日)に、「肉体について」を〈世界〉に、「教科書と私の文章―国語読本のこと―」を〈文学〉に発表。

九月、『乗合自動車』を筑摩書房より刊行。「井伏鱒二〈作家に聴く〉第九回(インタビュー)」が〈文学〉に掲載される。秋、那須・石巻・一ノ関・平泉・酒田を旅し、この旅に基づいて『奥の細道』の一週間が書かれる。

十月、『奥の細道』の一週間(のち『奥の細道』の杖の跡と改題)を〈別冊文藝春秋〉に発表。「十月十六日記」を十月執筆。十一月十日、文芸春秋新社主催の文芸講演会が甲府の県議事堂で開かれ、「弁解」という演題(以前行った対談や、雑誌に掲載された甲州に関する内容に、編集者による誤記があったためにその訂正を含めた内容)で講演をする。他に水原秋桜子、石坂洋次郎、中島健蔵、舟橋聖一、那須良輔の計六氏であった。翌十一日、水原秋桜子を迎えるために宿を訪れて来た飯田龍太を、紹介される。以降飯田龍太と交友を深めて行く。／『本日休診・集金旅行』(〈現代日本名作選〉)を筑摩書房より刊行。

十二月三十日、太宰治文学碑建立のための石を探しに小林富司夫らとともに片山の採石場を訪れ、井伏鱒二が碑石を決める。太宰治文学碑建設委員会が設立され、事務局を県庁内県観光連盟に置かれた。募金集めもあり、発起人と賛同者を募り、呼びかけに奔走する。

一九五三(昭和二十八)年 五十五歳

一月、早稲田文学の会が新宿「樽平」で開かれ、谷崎精二・浅見淵・木山捷平等と共に出席する。太宰治文学碑の建設地が決まる。／「炬燵明け」を〈新潮〉に、「サイカチの木」を〈新女苑〉に、「骨董」を〈群像〉に発表。

二月、太宰治文学碑の碑文に「富嶽百景」からの一節を採用することをきめる。石川淳が杉並区清水町二二四に転居してくる。／『「さざなみ軍記」の史料―平家と自分に関すること―』を〈文学〉に、「服部のお城山」を〈別冊文藝春秋〉に発表。

三月、阿佐ヶ谷会が、新築祝いを兼ねて火野葦平邸内の「鈍魚庵」で催され、上林暁・伊藤整・瀧井孝作・木山捷平・中島健蔵・白井吉見・小田嶽夫・外村繁・亀井勝一郎等と共に出席する。／「クラス会」を〈オール読物〉に発表。『井伏鱒二作品集』(全六巻五巻で中絶)を創元社より刊行。

四月、「小鮎」を〈中央公論〉に、「野辺地の睦五郎略伝」を〈文藝春秋〉に発表。「晩春の旅」が『年刊日本文学—昭和二十七年度』筑摩書房に収録される。

五月、「ある高校生」を〈改造〉に発表。

六月、堀辰雄の告別式（五月二八日信濃追分の自宅で死去）が芝増上寺で催され、参列する。佐藤春夫・川端康成・室生犀星・中村真一郎・石川淳等が出席した。／「灰皿」を〈芸術新潮〉に、「旗かぜ」を〈オール読物〉に発表。『ドリトル先生のキャラバン』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）を岩波書店より刊行。

七月二十一日、太宰治の文学碑「富岳百景」建立の下調べのため、小沼丹、吉岡達夫、小山清、編集者伴俊彦と御坂峠の現地を視察する。／「平家物語—さざなみ軍記—」を〈文芸〉に、「作中人物の用語」を〈新潮〉に発表。「かるさん屋敷」を〈毎日新聞〉に連載（四日—十一月十六日完結）。『純粹の声・風貌姿勢』（現代日本随筆選1）井伏鱒二・川端康成共著）を筑摩書房より刊行。

八月、「堀辰雄」を〈文学界〉に、「外国文学」を〈別冊文藝春秋〉に、「堀君と将棋の香車」（のち「堀辰雄と将棋の香車」と改題）を〈文芸〉に発表。「山椒魚」が『現代作家処女作集』（早稲田作家編第一集）（潮書房・『山椒魚』について）を付す）に収録される。

九月、「太宰君のこと—彼はサブタイトルの好きな作家であった—」（のち「太宰治のこと」と改題）を〈文学界〉に、「書評—年中行事煙滅の一例—（柳田国男著『不幸なる芸術』）」を〈文学〉に発表。随筆集『点滴』を要書房より、『井伏鱒二・中山義秀』（長篇小説全集15）を新潮社より刊行。「屋根の上のサワン」が『世界少年少女文学全集30』（創元社）に収録される。

十月、阿佐ヶ谷会が新築なった青柳瑞穂邸で催され、青柳瑞穂・瀧井孝作と共に幹事を勤める。木山捷平、小田嶽夫、伊藤整、亀井勝一郎、浅見淵、外村繁、上林暁、瀧井孝作、村上菊一郎等が集う。この時〈アサヒグラフ〉の記者が取材にくる。三十一日、山梨県南都留郡河口湖町河口字御坂峠二千七百四十に建った太宰治の文学碑「富岳百景」（碑陰文は井伏鱒二・碑文を彫ったのは望月徳太郎）の除幕式で、開会の辞を述べている。伊馬春部、小田嶽夫、青柳瑞穂、浅見淵、村上菊一郎、小山清らが列席する。午後六時から甲府の県会議事堂で文芸講演会が開かれ、講師として伊馬春部、小田嶽夫、青柳瑞穂、檀一雄、浅見淵らと出席する。翌日も富士吉田市で記念講演会が開かれた。／「辞書の不便」を〈図書〉に発表。「十一月十二日記」を十月執筆

十一月、新築なった青柳瑞穂邸で開かれた阿佐ヶ谷会の様子を撮った写真が〈アサヒグラフ〉（十一日号）に掲載される。この年の

初冬、安岡章太郎の訪問をうける。

十二月、阿佐ヶ谷会が開かれる。／「前がき」(太宰治「洋之助の気焰」に付したものを〈文藝〉に、「御坂の碑」を〈文学界〉に、「安土セミナリオ―その一―」を〈別冊文藝春秋〉に発表。『井伏鱒二集』《現代日本文学全集41》を筑摩書房より、『本日休診・遙拝隊長』(角川文庫)を角川書店より刊行。

一九五四(昭和二十九)年 五十六歳

一月、「お嬢さん」を〈新潮〉に発表。「文学を見る」が〈毎日グラフ〉(一月十三日号 写真 今官一文)に掲載される。『井伏鱒二集』(縮刷版)を新潮社より刊行。

二月、「魚金さん」を〈新潮〉に、「宗湛と治郎作」(「安土セミナリオ」の一部)を〈別冊文藝春秋〉に発表。

四月、「弥助の奮戦」(「安土セミナリオ」の一部)を〈別冊文藝春秋〉に、「石州わかめ」を〈中央公論〉に、「青柳君の形態―順序不同帖・4」を〈新潮〉に発表。「漂民宇三郎」を〈群像〉に連載(三十年十二月)する。「旅」(序に代えて)が『若き日の旅』(河出新書 井伏鱒二編著)に収録される。

五月二十二日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、ゲストとして招待した蔵原伸二郎、辰野隆に会う。蔵原伸二郎に会うのは戦後初めてであり、辰野隆には、聚芳閣勤務の時以来であった。木山捷平、小田嶽夫、河盛好蔵、外村繁、火野葦平、青柳瑞穂、瀧井孝作、上林暁、中野好夫等が集う。／「痴人」(のち「白鳥の歌」と改題)を〈文学界〉に、「黒い壺」を〈文藝春秋〉に、「女中さん」を〈新潮〉に、「三月上旬」を〈オール讀物〉に発表。『井伏鱒二・太宰治集』《昭和文学全集36》を角川書店より、『井伏鱒二・河上徹太郎・中島健蔵集』を創元社より刊行。「昭和文学小説百選―座談会 井伏鱒二・伊藤整・高見順・永井龍男・丹羽文雄・河盛好蔵―」《現代随想全集22》が〈新潮〉に掲載される。

六月、秋沢三郎の会(於新宿・十和田)に伊藤整、外村繁、瀬沼茂樹らと出席する。「神谷川の旦那」を〈新潮〉に、「散歩の友」を〈改造〉に、「井伏鱒二より太宰治への手紙」を〈文藝〉に、「御坂の碑」を〈山梨日日新聞〉(19日)に発表。「日記」を〈文学会〉に発表。

七月、「落武者―安土セミナリオその三―」を〈別冊文藝春秋〉に、「タムリン」を〈文芸〉に、「テクリン一家」を〈新潮〉に発表。

八月、「難民その他―安土セミナリオ―」（「安土セミナリオ」の一部）を〈別冊文芸春秋〉に、「雨の歌―新歳時記・Ⅱ」を〈文学界〉に発表。

九月、「近目と竹法螺」（後「法螺の音」後にさらに「貝の音」と改題）を〈小説新潮〉に発表。『集金旅行・さざなみ軍記』（角川文庫）を角川書店より刊行。

十月三日、阿佐ヶ谷会が開かれる。下部温泉の老舗「源泉館」へは、昭和初期からの定宿の一つとして宿泊した。部屋は、必ず三階東角の十畳間「宮の五番」で、窓ガラスの一枚には鳥を描いたステンドグラスが施してあった。／「熊」について（のちに「チェーホフの『熊』について」と改題）を〈文藝〉に、「庭前」を〈婦人公論〉に、「甲府」を〈週刊朝日〉に、「小畠村の話」を〈心〉に、「艶書」を〈新潮〉に、「下部の湯」を〈旅〉に、「解説」を『丹羽文雄集・火野葦平集』（昭和文学全集46）（角川書店）に発表する。「去年の小鳥の巣」を執筆（「ななかまど」に収録）する。

十一月、阿佐ヶ谷会が催され、火野葦平、伊藤整、瀧井孝作、中島健蔵、古谷綱武、河盛好蔵、浅見淵、木山捷平、臼井吉見、小田嶽夫、外村繁、亀井勝一郎等と共に出席する。／「塩の山、差出の磯」を〈婦人画報〉に発表。

十二月、久保田万太郎の呼びかけによる「盆暮会」に石川淳、三好達治、丸岡明、河上徹太郎らと出席する。山廬（飯田蛇笏）古希祝賀会が神田如水会館で催され、出席する。二十六日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、木山捷平・小田嶽夫・伊藤整・浅見淵・火野葦平、青柳瑞穂、瀧井孝作、亀井勝一郎、臼井吉見、外村繁、村上菊一郎等と集う。火野葦平が幹事で、下関の河豚料理であった。／「病中所見」を〈世界〉に、「ななかまど―或る贗物の話―」（のちに「ななかまど」と改題）を〈文学界〉に、「在所言葉」を〈暮しの手帖〉に、「時計・会・材料その他―直木賞受賞の頃のこと―」を〈別冊文芸春秋〉に発表。『黒い壺』（昭和名作選6）を新潮社より刊行。

一九五五（昭和三十）年 五十七歳

一月、「吉凶うらない」が「東京の空の下には」（監督蛭川伊勢夫・出演 三橋達也、山田五十鈴、宇野重吉、滝沢修）と題されて映画化される。／「早稲田界限」を〈新潮〉に発表。

二月十七日、坂口安吾死去。石川淳、尾崎士郎、小林秀雄、壇一雄らと通夜にいく。／「一別以来」を〈知性〉に、「河童の騒ぎ」

(のち「河童騒動」と改題)を〈週間朝日別冊〉に発表。『ななかまど』を新潮社より刊行。

三月、静岡県来宮を庄野潤三・小山清らと共に訪ねる。／「遍照寺さん」を〈文学界〉に、「将棋観戦記」を〈産経新聞〉に、「私の手控帖」(十二月)を〈文芸〉に発表。

四月、「子熊の夜遊び」を〈新潮〉に発表。

五月、「伊之助の短文」を〈文藝春秋〉に発表。「白毛」が『戦後十年名作選集』(光文社)に収録される。

六月、小沼丹に伴われて三浦哲郎が井伏邸を訪れる。／「開墾村の與作の陳述」(のち「開墾村の与作」と改題)を〈別冊文藝春秋〉に、「弘光寺さん」を〈芸術新潮〉に、「東京散歩」を〈世界〉に発表。『在所言葉』を修道社より、『遙拝隊長・本日休診』(新潮文庫)を新潮社より刊行。

七月、「手洗鉢」を〈文芸〉に、「曾良の随行記」を〈学燈〉に、「ドン河の鯉釣」を〈風報〉に、「広島県内早廻り記―広島風土記―」を〈新潮〉に発表。

八月、志賀直哉に新居落成祝いとして、「志賀直哉と尾道」を収録している随筆集『風貌姿勢』を贈る。／「再疎開―昭和二十年の自画像―」を〈新潮〉に発表。『片棒かつぎ』(河出新書)を河出書房より刊行。

九月三日、千葉の佐原を訪れる。／「瀧井さんの釣」を〈文学界〉に、「釣場」を〈オール読物〉に発表。

十月、「下足番」を〈新潮〉に、「仲人の経験」を〈婦人画報〉に、「あの頃の太宰君」を『太宰治全集』(筑摩書房)第1巻月報1に発表。筑摩書房版『太宰治全集』の「太宰治全集予告パンフレット(一)」、「(二)」に文を寄せる。

十一月、「ダス・ゲマイネ」の頃」を『太宰治全集』(筑摩書房)第2巻月報2に発表。『鐘供養の日』が『日本抵抗文学選』(三一書房)に収録される。

十二月、「鳥悠の女将」を〈別冊文藝春秋〉に、「河盛好蔵の履歴」を〈新潮〉に、「御坂峠にゐた頃のこと」を『太宰治全集』(筑摩書房)第3巻月報3に発表。『白鳥の歌』を筑摩書房より刊行。『ドリトル先生月へゆく』(ロフティン・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)を岩波書店より刊行。

一月、「銃の番号」を〈世界〉に、「修善寺桂川」を〈新潮〉に、「いろいろ草紙」を〈群像〉に、「『懶惰の歌留多』について」を『太宰治全集』（筑摩書房）第四巻月報4に発表。『源太が手紙』を筑摩書房より、『山椒魚・遙拝隊長』（岩波文庫）を岩波書店より刊行。

二月、「来訪者」を〈オール読物〉に、「酒」を〈文藝春秋〉に、「岡穂を送る」（詩）を〈文芸〉に、「余談」を『太宰治全集』（筑摩書房）第五巻月報5に発表。『井伏鱒二・豊島与志雄集』（少年少女のための現代日本文学全集18）を東西文明社より、『ジョン万次郎漂流記』（角川文庫）を角川書店より刊行。

三月、牧野信一・二十年忌墓前祭が小田原市清光寺で営まれ、久保田万太郎・尾崎一雄・佐々木茂素らと共に参列する。／「入歯」を〈新潮〉に、「戦争初期の頃」を『太宰治全集』（筑摩書房）第六巻月報6に発表。

四月、山梨日日新聞社が山日芸術賞を創設し、飯田蛇笏、中村星湖、と共に文学部門の審査委員となる。審査委員会は甲府の旅館・梅ヶ枝で行われ、第一回文学賞には飯田龍太が選ばれた。春から三十二年春にかけて、ささやま街道・久慈街道・田妻わかひ路・備前街道・天城山麓を巡る道・近江路等を旅行し、後に『七つの街道』にまとめる。／「易学雑誌から」を〈小説新潮〉に、「甲府にゐた頃」を『太宰治全集』（筑摩書房）第七巻月報7に発表。『漂民宇三郎』を講談社より刊行。

五月、『漂民宇三郎』その他により昭和三十年年度芸術院賞を受賞する。／「報告的雑記」を『太宰治全集』（筑摩書房）第八巻月報8に発表。『ささなみ軍記』（名作歴史文学選集）を彰考書院より刊行。

六月、第四回将棋大会が毎日新聞後援で芝美術クラブに於いて催され、里見淳・瀧井孝作・木山捷平・阿部真之助・大山康晴名人・升田幸三王将らと共に参加する。／「水車は廻る」を〈オール小説〉に、「篠山街道―城といふものは廃墟になつてから美しく見える―」を〈別冊文藝春秋〉に、「太宰君の仕事部屋」を『太宰治全集』（筑摩書房）第九巻月報9に発表。

七月、「蝙蝠座」を〈小説春秋〉に、「使い古しの歯ブラシ」を〈オール読物〉に、「還暦の鯉」を〈暮しの手帖〉に発表。

八月六日、観瀾山に建った太宰治の記念碑（青森県東津軽郡蟹田町大字小国字国山一の三）の除幕式に出席する。後、青森市に帰り、ねぶた祭りを見た後、太宰治縁の料理屋「おもだか屋」による。／「『が』『そして』『しかし』」を〈文学界〉に、「ある草案」を〈文藝春秋〉に、「久慈街道」を〈別冊文藝春秋〉に、「牧野信一―作家の苦悩―」を〈新潮〉に発表。『多甚古村』（岩波文庫）を岩波書店より刊行。『遙拝隊長』が『戦後十年傑作小説全集』河出書房に収録される。

九月、「駅前旅館」を〈新潮〉(三十二年九月)に連載。「漫遊記」を〈知性〉に、「カラハナ草」を〈暮しの手帖〉に、「むかしばなし」を〈文学界〉に、「蟹田の碑」を『太宰治全集』(筑摩書房)第十二巻月報12に発表。『井伏鱒二・太宰治名作集』〈少年少女日本文学選集18〉をあかね書房より刊行。「白毛」が『戦後十年傑作小説全集2』(河出書房)に収録される。

十月、「社交性」を〈小説公園〉に、「備前街道」を〈別冊文藝春秋〉に発表。

十一月、『井伏鱒二・阿部知二・深田久弥・龍胆寺雄・伊藤整・藤沢恒夫・堀辰雄・梶井基次郎・芹沢光治良集』〈現代日本小説大系47 モダニズム3〉を河出書房より刊行。

十二月、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で開かれ、小田嶽夫、木山捷平等と集う。外村繁の『筏』の野間文芸賞受賞祝賀会も兼ねた会であった。荻窪『えすかるぼ』で山梨日日新聞主催の「新春対談」を深沢七郎と行う。／「甲斐わかひこ路」を〈別冊文藝春秋〉に、「太宰治のこと」を〈文藝臨時増刊・太宰治読本〉に発表。『井伏鱒二・尾崎一雄・林芙美子・上林暁・伊藤整・坪田譲治集』〈現代日本小説大系54 昭和十年代7〉を河出書房より、『屋根の上のサワン』(角川文庫)を角川書店より刊行する。

一九五七(昭和三十二年) 五十九歳

一月一日、山梨日日新聞の「新春対談」で深沢七郎との対談が掲載される。／「泊鷗会」を〈群像〉に、「徴用中の旅行」を〈小説新潮〉に、「記者のいろいろ」私は雑誌より人間に興味がある」を〈文学界〉に、「私の動物誌」を〈東京新聞〉(夕刊)に連載(七日)、「カモシカの寒立ち」・十四日、「熊のツキノワ」・二十一日、「タヌキとムジナ」・二十八日、「テンといふもの」)する。

二月、「私の動物誌」を〈東京新聞〉(夕刊)に引き続き連載(四日、「イタチといふもの」・十一日、「イヌについて」・十八日、「コウモリ」・二十五日、「自分の飼った鳥獣」)する。「河鹿」を〈オール読物〉に、「柏尾山」を〈暮しの手帖〉に、「天城山麓」を〈別冊文藝春秋〉に発表。『樗山節考』をめぐって―対談 深沢七郎・井伏鱒二―が〈文芸〉に掲載される。

三月、亀井勝一郎・木山捷平・伊藤整らと共に秋田を訪れる。／『白山脈』について 井伏鱒二氏に聞くが〈図書新聞〉(十六日)に掲載される。

四月二日、京都の大文字屋にて 永井龍男・河盛好蔵・井上靖が集う。『文芸首都』二十五周年記念祝賀会が東京「椿山荘」で開催され、出席する。／「近江路」を〈別冊文藝春秋〉に発表。

五月、下部温泉に出掛ける。／「光田君のよこした地図」を〈文藝春秋〉に、「御近所のこと」を〈中央公論臨時増刊文芸特集〉に、「南豆荘の将棋盤」を〈雲母〉に発表。「あとがき」を『富嶽百景・走れメロス』（岩波文庫）に付す。『井伏鱒二集』（中学生文学全集24）を新紀元社より刊行。「座談会『小説の話』 浅見淵・瀧井孝作・尾崎一雄・外村繁・島村利正・上林暁」が〈素直〉に掲載される。

六月、『集金旅行』が「松竹」で映画化（中村登監督、佐田啓二主演）される。／「十二本の山毛櫨」を〈別冊文藝春秋〉に連載（三十五年三月前篇終了）する。『還暦の鯉』（九月二十日記）昭和二十七年秋頃執筆・「三味線唄」昭和二十七年執筆・「将棋」昭和三十一年執筆・『イソップのお話』を読んで・「夜の横町」・「旅中所見」・「米粒のこと」・「手紙の往復」他を収録）を新潮社より刊行。「ハンダ先生」が『日本の文学・小学三年生』（あかね書房）に収録される。

七月、「岩田君のこと」を〈オール読物〉に発表。「鯉」が『私たちの昭和文学選』（青少年少女名作ライブラリー8）（三十書房）に収録される。

九月二十五日、阿佐ヶ谷会が開かれる。

十月、「蜜蜂塚」を〈随筆サンケイ〉に、「小畠代官所」を〈サンデー毎日〉（特別号）に、「丸木橋に関する思ひ出」を〈小説新潮〉に発表。『漂民宇三郎』（ヘミリオンブックス）を講談社より、『集金旅行』（新潮文庫）を新潮社より、『しびれ池のカモ』（岩波少年文庫）を岩波書店より刊行。

十一月、「新潮同人雑誌賞」選考会に於いて佐藤春夫・永井龍男・中山義秀・伊藤整・高見順と共に選考する。十一日、十二日、小沼丹、吉岡達夫、石井立らと、千葉県大原町へ「満寿丸」（井伏満寿二の満寿を取る）と命名された漁船（所一哉所有）を見に行くことを兼ねた釣り旅行に行く。／『秋津温泉』（藤原審爾作品集1）（森脇文庫）の解説を発表。『駅前旅館』を新潮社より、紀行文『七つの街道』を文藝春秋新社より刊行。

十二月、阿佐ヶ谷会の忘年会が青柳瑞穂邸で催され、木山捷平・小田嶽夫・亀井勝一郎・瀧井孝作らと共に出席する。荻窪病院で盲腸の手術をうけ、病院で年を越す。／『井伏鱒二集』（現代日本小説大系新装54）を河出書房より刊行する。「多甚古村」が『昭和名作集5』（日本国民文学全集31）河出書房新社に収録される。

一月、腹膜炎を併発し二十日あまり荻窪病院に入院する。入院中「自分の一番やりたいことは、絵を描くことであつた」（『荻窪風土記』）と思い、退院後日曜画家として天沼八幡通りの新本燦根画塾に通う。この画塾には六年程通う。／「御隠居さん」（後に「御隠居」後「安中町の土屋さん」と改題）を〈新潮〉に、「病中雜記」を〈世界〉に、「大山・升田三番勝負觀戰記」を〈産経新聞〉（一日～十三日）に発表。春から、翌年の春にかけて、毎月のように外房総・甲州・吉野・淡路などの各地を旅行する。後にこれを『釣師・釣場』（三十五年二月・新潮社刊）にまとめる。

二月、「その印象」を『火野葦平選集』月報第一号に、「仮想演説」を〈新潮〉に発表する。

三月、『井伏鱒二・太宰治集』〈昭和文学全集36〉を角川書店より刊行。

四月一日、「すいしよのこと」を〈小学三年生〉に発表。

五月、「竹馬の友勘蔵さん」を〈小学三年生〉に発表。『平家物語』〈日本国民文学全集9〉（中山義秀共訳）を河出書房新社より刊行。六月五日、「山梨ペンクラブ」の設立総会が県民会館大講堂で開かれ、この総会に、飯田蛇笏、深沢七郎らと列席し、山梨ペンクラブ発会式で祝辞を述べる。十九日、桜桃忌に亀井勝一郎・河盛好蔵・外村繁・木山捷平らと共に出席する。／「トートーという犬」を〈小学三年生〉に発表。

七月、第三十九回芥川賞より芥川賞選考委員となり、瀧井孝作・佐藤春夫・川端康成・丹羽文雄・舟橋聖一・石川達三・井上靖・中村光夫・永井龍男・宇野浩二の各委員の下に選考委員会が開かれる。当日は病気のため欠席したが「飼育」（大江健三郎）を推す旨を伝える。この後、昭和四十年下半期まで委員をつとめる。／「木靴の山」を〈東京新聞〉（夕刊・八日～三十四年一月十二日・一八七回）に連載する。「晩春実記」（後「日曜畫家」と改題）を〈新潮〉に、「め組の半鐘」を〈世界〉に発表。

八月、「平野屋さんの釣」を〈小説新潮〉に、「わが愛する都市の記」を〈市政〉に発表。

九月十四日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催される。

十月、新本燦根画塾の「かるきす油彩展」（二十日～二十五日）がヤナセギャラリーで開催され、魚を描いた油絵を出品する。／「リンドウの花」（後ち「リンドウの花」と改題）を〈声〉に発表。

十一月、『河鹿』を筑摩書房より、『井伏鱒二集』〈新選現代日本文学全集1〉を筑摩書房より刊行。

一九五九（昭和三十四）年 六十一歳

一月、千葉県大原町へ「釣師・釣場」（「外房の漁師の釣」）の取材のために訪れる。／「珍品堂主人」の連載を〈中央公論〉に始める。「釣師・釣場」を〈小説新潮〉に連載（十二月完結）する。「月日へのブレイキ」（のち「猫」と改題）を〈新潮〉に、「今日今日記―俳句と女史のアルバイト船―」を〈雲母〉に発表する。

二月、「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。

三月、「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。鼎談「とんと昔ひとつかたれ―木下順次作『日本民話選』をめぐって」（座談会・井伏鱒二、中野重治、司会いぬいとみこ）が〈民話〉（三月号）に掲載される。

四月、杉並区清水町の自宅の改築をはじめ。／「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。「文学よもやま話」（座談会 井伏鱒二・外村繁・島村利正・上林暁・網野菊）が〈素直〉に掲載される。

五月、自宅の改築中。／「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。「艶書」を〈新潮〉に発表。

六月、自宅の改築中。／「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。「貸間あり・おこまさん」（角川文庫）を角川書店より刊行。

七月、杉並区清水町の自宅の改築が終わる。旧井伏邸が千葉県夷隅郡大原町の所一哉邸内に移築復元される。尊魚庵と命名された。

／「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。「寓居」を〈新潮〉に、「一度の面識」を『梶井基次郎全集』（筑摩書房）月報3に発表。

八月、「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載。「七浦の漁師原」を〈世界の旅・日本の旅〉に、「昨日の会」を〈新潮〉に、「易たてのこと」を〈オール読物〉に発表。

九月、「珍品堂主人」を〈中央公論〉に引き続き連載し、完結する。「太宰と料亭『おもだか屋』」を『日本文学全集』（五十四巻附録・新潮社）に発表。

十月、この年から翌年にかけて、土佐・瀬戸内海・甲州・近江・大阪・金沢・熊野・知多半島・能登等の各地を旅行する。後にこれを『取材旅行』（三十六年九月・新潮社刊）にまとめる。／『珍品堂主人』を中央公論社より、『木靴の山』を筑摩書房より刊行。「ドン河の鯉」が『風報随筆』（風報編集室）に収録される。

十一月、「机上風景—質問に答へて—」(のち「机上風景—雑誌編輯者の質問に答へて—」と改題)を〈文学界〉に、「評者へ」を〈産経新聞〉(二日)に、「山」を〈三田文学〉に発表。

十二月一日、古木鐵太郎の『紅いノート』出版記念会が大隈会館で催され、佐藤春夫、青柳瑞穂、伊藤整、尾崎一雄、小田嶽夫、木山捷平、榊山潤、渋谷駿、坪田譲治、十和田操、庄野潤三らと出席する。／「へんろう宿—私の描いた四国」を〈旅 四国特集号〉に発表。

一九六〇(昭和三十五年) 六十二歳

一月、「草野球の球審」を〈新潮〉に、「交遊断片・青木南八」を〈群像〉に、「プロローグとエピグラフの間違い」を〈小説新潮〉に発表。「西海日報記者」を〈小説新潮〉(六月)に連載する。

二月、「瀧井孝作・井伏鱒二・芸術院会員当選を祝う会」が田村町「四川飯店」で開かれ瀧井孝作・志賀直哉・河盛好蔵・谷川徹三・尾崎一雄・阿川弘之・網野菊・藤枝静男・島村利正らと集う。／「葦平さんの河童図」を〈東京新聞〉(八日)に、「博多で逢った葦平さん」を〈週刊朝日〉に発表。「釣師・釣場」を新潮社より刊行。

三月、日本芸術院会員となる。二十日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催され、幹事を務める。火野葦平を偲ぶ会(二月二十四日死去)でもあった。『珍品堂主人』が「東宝」で映画化(豊田四郎監督、出演 森繁久弥・淡島千景)される。「琴の記」を〈週間朝日 別冊〉に発表。

四月、「谷津」を〈風報〉に、「四月二日記」を〈朝日新聞〉(四日)に、「武蔵の国の住人」を『平家物語』〈古典日本文学全集16〉(筑摩書房)月報に発表。

五月、『井伏鱒二集』〈日本文学全集32〉を新潮社より刊行。

六月、「二人一話」を〈新潮〉に発表。

七月一日、馬瀬川で瀧井孝作・三浦哲郎らと釣りを楽しむ。「山椒魚」の自作朗読の〈アサヒソノラマ〉(8月号・七月二日)が発売される。／「お袋」(のち「おふくろ」と改題)を〈小説中央公論〉(臨時増刊号)に発表。「取材旅行」を〈小説新潮〉(三十六年六月)に連載する。

八月、「戦国絵巻の大三島」（のちに「大三島」と改題）を〈旅〉に、「蛍の季節」を〈新潮〉に発表。

九月、「七月二十三日記」を〈新潮〉に発表。『井伏鱒二集』〈少年少女日本文学名作全集23〉を東西五月社より、『ドリトル先生航海記』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）を岩波書店より、『ふるさとを訪ねて 広島』〈少年少女文学風土記9〉（「鞆ノ津付近」編著）を泰光堂より刊行。

十月、「御高評」を〈新潮〉に発表。

十一月、「金谷完治―九月十九日記―」を〈心〉に発表。

十二月、「葛原勾当」を〈小説新潮〉に発表。『駅前旅館』（新潮文庫）を新潮社より、『保元物語・平治物語』（日本文学全集7）（中山義秀共訳）を河出書房新社より刊行する。

一九六一（昭和三十六）年 六十三歳

一月、「来る鳥」を〈野鳥〉に、「南島風土記」を〈新潮〉に発表。

二月、随筆集『昨日の会』（「かみなり」を収録）を新潮社より刊行。

三月、能登半島へ、骨董屋「青苔堂」が焼物の買付けに行くと言うので、その現場を見物することにし、共に旅行する。／『厄よけ詩集』（限定版）を国文社より刊行。

五月、取材のため山梨日日新聞社の小林富司夫と共に、「台風7号」（昭和三十四年八月）によって大きな被害を受けた北巨摩郡武川村を訪れる。この時の取材が後に「洪水銀座の村」として『取材旅行』（昭和三十六年九月、新潮社刊）に収められる。

六月、『引越やつれ』（角川小説新書）を角川書店より刊行。

七月、「野犬」を〈新潮〉に発表する。『珍品堂主人』を中央公論社より刊行。

八月、「武州鉢形城」を〈新潮〉（三十七年七月完結）に連載する。『片棒かつぎ』（河出新書）を河出書房新社より刊行。

九月、「無心状」を〈小説新潮〉に、「ナメシ革」を〈心〉に発表。『取材旅行』を新潮社より刊行。『ドリトル先生アフリカゆき』（ドリトル先生物語全集1）（ロフティング・井伏鱒二訳）、『ドリトル先生と秘密の湖』（ドリトル先生物語全集10）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より、『ロビンソン漂流記』（世界童話名作全集）（デフォー・井伏鱒二訳）を鶴書房より刊行。

十月、「釣座談会 井伏鱒二、丸岡明、岡村夫二」が『風報』（十月号 編集兼発行人尾崎一雄）に掲載される。『ドリトル先生航海記』（ドリトル先生物語全集2）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。

十一月、「現代の埴輪づくり」を『芸術新潮』に発表。『井伏鱒二集』（現代日本文学全集70）を筑摩書房より、『ドリトル先生の動物園』（ドリトル先生物語全集5）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。

十二月、「月の絵」を『別冊文藝春秋』に発表。『ドリトル先生と緑のカナリヤ』（ドリトル先生物語全集11）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。

一九六二（昭和三十七）年 六十四歳

一月、小山清が失語症にかかり執筆不能状態になっていたため、亀井勝一郎と共に友人に援助を呼びかける。／「平野零児のこと」を『小説新潮』に、「大岳さん」を『西日本新聞』（一日）に、「十月の日記」を『風景』に、「平野零児のこと」を『小説新潮』に発表。『ドリトル先生の郵便局』（ドリトル先生物語全集3）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。

二月、「失念事」を『文藝春秋』に発表。『井伏鱒二集』（中学生文学全集24）を新紀元社より、『井伏鱒二・永井龍男集』（日本現代文学全集75）を講談社より、『ドリトル先生のサーカス』（ドリトル先生物語全集4）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より、『ドリトル先生航海記・オズのまほう使い・シートン動物記』（少年少女新世界文学全集16・アメリカ篇6）（ロフティング・井伏鱒二訳、バーム・松村達雄訳、シートン・竜口直太郎訳）を講談社より刊行。

三月、「報告―芥川賞直木賞決定発表―」を『文藝春秋』に発表。『ドリトル先生のキャラバン』（ドリトル先生物語全集6）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。「対談 郷土巡礼8 広島 井伏・知事大原博夫」が『週刊サンケイ』（7日）に掲載される。

四月、下部の栃代川で釣りを楽しむ。／『ドリトル先生と月からの使い』（ドリトル先生物語全集7）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。春、下部温泉の源泉館で、気心の知れた仲間とともに甲州を旅する会を発足し、井伏鱒二が甲府行をもじって「幸富講」と命名する。この会は、毎年春と秋に甲州で会がもたれ、その後も、会員の移動はあったが平成四年まで続いた。

五月五日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催される。『ドリトル先生月へゆく』（ドリトル先生物語全集8）（ロフティング・井伏鱒二訳）

を岩波書店より刊行。

六月、『閑』（生活の随筆8）（共同執筆）を筑摩書房より、『ドリトル先生月から帰る』（ドリトル先生物語全集9）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。

七月、下旬から八月下旬まで、避暑と保養を兼ねて、北巨摩郡高根町箕輪の農家八巻家で過ごす。ここで小説「故篠原陸軍中尉」を執筆する。／「余談」を『定本太宰治全集5』（筑摩書房）に発表。『井伏鱒二』（昭和文学全集16）を角川書店より、『ドリトル先生の楽しい家』（ドリトル先生物語全集12）（ロフティング・井伏鱒二訳）を岩波書店より刊行。

八月、『岡―埴輪の旅―』を〈小説中央公論〉に、「英語について」を〈文芸朝日〉に発表。

九月、「芥川賞・直木賞決定発表―半票を投じる」を〈文藝春秋〉に発表。

十月、飯田蛇笏の葬儀に、三好達治、石原八束らと列席する。／「表札」を〈小説新潮〉に、「盆踊」を〈風報〉に、「故篠原陸軍中尉―『寄生木』のダイジェスト篇―」を〈新潮〉に発表。

十一月、「石臼の話」を〈毎日新聞〉（夕刊三日）に発表。『溪谷』（井伏鱒二編 井伏鱒二作品はない）を有紀書房より刊行。

十二月、「山廬先生」を〈俳句〉（追悼特集飯田蛇笏）に発表。

一九六三（昭和三十八）年 六十五歳

一月、「正宗さんのこと」を〈文芸〉に、「子熊のクロ」を〈新潮〉に発表。

二月、「誕生日」を〈オール読物〉に発表。

三月、『武州鉢形城』を新潮社より刊行。

四月、木山捷平の芸術選奨文部大臣賞（『大陸の細道』）祝賀会が中野「ほととぎす」で催され、谷崎精二・三好達治・小田嶽夫・亀井勝一郎・藤原審爾・小沼丹・三浦哲郎らと共に出席する。十六日、下部の栃代川で飯田龍太・小林富司夫等と釣りを楽しむ。／

「戦死・戦病死」を〈小説中央公論〉に発表。

五月、「芦安一等兵」を〈中央公論〉に、「郷土部隊」を〈オール読物〉に、「亡友中村地平」を〈新潮〉に、「ふるさとの音」を〈文芸朝日〉に発表。「つかぬことを」を〈小説新潮〉に連載を始める。

六月、「つかぬことを」の〈小説新潮〉への連載を終える。「南方ぼけの頃」を〈新潮〉に発表。

七月、「はじめての本『夜ふけと梅の花』」を〈週刊読書人〉(十八日)に発表。『珍品堂主人』(角川文庫)を角川書店より刊行。

八月、「片割草紙」を〈新潮〉に発表。「佐原の釣」を〈水郷〉に発表。

十月、甲府市舞鶴城に建てられた飯田蛇笏文学碑の除幕式に、建設委員会の委員として、三好達治、山本健吉らと共に列席する。「私は蛇笏先生の生前に何度か山廬を訪ねた。そのたびに、自分は今、厳しい人と接していると感じつつづけていた。何を話しかけても、返事は次第に俳句のことにつながりを持つて行く。人と話しながら、心のなか俳句を作っているらしい。俳句以外のことは念頭にない人に見えた」(『明治の俳人』・『日本詩人全集』月報新潮社刊)。式後に開かれた記念講演会では「蛇笏碑のこと」の演題で講演を行う。／「時計もくれますか」(のち「時計と直木賞」と改題)を〈オール読物〉に、「サワンのこと」を〈教室の窓〉に発表。十一月、「コタツ花」を〈文芸朝日〉に発表。『平家物語』(『国民の文学10』(中山義秀共訳)を河出書房新社より刊行。十二月七日、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で催される。／「中込君の釣」を〈小説中央公論〉に発表。『無心状』を新潮社より刊行。

一九六四(昭和三十九)年 六十六歳

一月、「横丁の話」を〈新潮〉に、「カラス」(のちに「バンガイといふカラス」と改題)を〈小説新潮〉に発表。

二月、『ジョン万次郎漂流記』が舞台化され明治座で上演される。「稽古場へ行く道」を〈オール読物〉に、「はじめての自装本『さざなみ軍記』」を〈読売新聞〉(九日)に発表。

三月、「日記」を〈風景〉に発表。

四月、「東油木村の藤八」を〈オール読物〉に、「ある交友」を〈小説新潮〉に、「イタドリ絵皿」を〈週刊読書人〉(六日)に、「亡友の諧謔」(のちに「尾崎士郎の諧謔」と改題)を〈日本経済新聞〉(十九日)に発表。

五月六日、佐藤春夫死去(文教区関町二〇七 佐藤家)し、十日葬儀に列席する。／「茅ノ島所見」を〈新潮〉に発表。

六月、「笠雲」(のちに「富士の笠雲」と改題)を〈別冊文藝春秋〉に、「サクランボ―季節の言葉―」を〈小説新潮〉に、「五月十六日記」を〈本の手帖〉に、「大山名人の生態」(のち「大山名人のこと」と改題)を〈山陽新聞〉(十二日)に発表。『釣師・釣場』(新潮文庫)を新潮社より刊行。

七月、夏、長野県富士見にある別荘で夏を過ごす。以降、四十四年まで夏はここで過ごす。／「阿部真之助さんのこと」を〈東京新聞〉（夕刊十三日）に発表。「回想佐藤春夫―座談会 井伏鱒二・檀一雄・中谷孝雄・安岡章太郎・山本健吉」が〈文芸〉に掲載される。

九月、「先輩」を〈小説新潮〉に発表。『井伏鱒二全集』（全十二巻、昭和四十年八月完結）を筑摩書房より、『本日休診』（現代日本文学英訳選集3）（サイデンスブック）を原書房より、『七つの街道』（新潮文庫）を新潮社より刊行。

十月、飯田蛇笏三回忌に列席する。／「無題」を〈風韻無限〉（岡不可止遺文集）に発表。

十一月、「備前・やきもの・その美・その思い出（備前町観光記）」を『日本のやきもの5』（金重陶陽 葛西宗誠写真 淡交新社刊）に発表。『井伏鱒二名作集』（少年少女現代日本文学全集36）を偕成社より刊行。

十二月、「新日本名所案内35―伊豆松崎―」を〈週刊朝日〉（二十五日）に発表。

一九六五（昭和四十）年 六十七歳

一月、「姪の結婚」を〈新潮〉に連載（八月より「黒い雨」と改題、四十一年九月完結）する。「黒い雨」の連載の間、幾度となく広島を訪れ取材を行う。／「くるみが丘」を〈オール読物〉（十二月）に、「柴芽谷部落」を〈展望〉に、「築山」を〈国立博物館ニュース〉（一日）に、「弘光寺の杉戸―すまひ訪問―」を〈木〉に、「週間日記」を〈週刊新潮〉（二十五日）に発表。

二月、「野村万蔵邸の能舞台―すまひ訪問―」を〈木〉に発表。「亡友の諧謔」が『飄々録 士郎回想』（尾崎清子による刊行）に収録される。

三月、「廉塾―すまひ訪問―」を〈木〉に発表。

四月、「壺井邸の簾の間―すまひ訪問―」を〈木〉に発表。

五月、『ジョン万次郎漂流記』（ジュニア版日本名作選16）を偕成社より刊行。

六月、「モグラの庭」を〈心〉に発表。

七月、「上脇進の口述」（のちに「児玉花外―上脇進の口述―」と改題）を〈小説新潮〉に発表。

八月七日、木下夕爾の追悼式で追悼の言葉をのべる。

十月、第一回「雲母」全国俳句大会が明治神宮に於いて催され、金子兜太らと共に出席し、講演を行う。小野十三郎の『新世界』出版祝賀会が甲州の常盤ホテルで開かれ、出席する。／『井伏鱒二集』《現代の文学6》を河出書房新社より刊行。

十二月、「五十何年前のこと」を『漱石全集』（岩波書店）月報1に発表。「風貌姿勢・堀辰雄」「一人一評」が『堀辰雄全集10巻』（角川書店）に収録される。『駅前旅館』（角川文庫）を角川書店より刊行。

一九六六（昭和四十二）年 六十八歳

一月、広島テレビで阿川弘之と対談する。二十九日「釣・旅・酒——座談会 井伏鱒二・小沼丹・伊馬春部」が〈CBC TV〉で放送される。／「富士に魅せられて——新春座談会 井伏鱒二・岡田紅陽・武田泰淳・林武一」が〈潮〉に掲載される。

三月、「泰さんと珍品堂」（談話）が『生きている名作のひとつ』（読売新聞社）に収録される。『井伏鱒二集』《現代文学大系43》を筑摩書房より、『くるみが丘』を文藝春秋社より刊行。

七月、『定本木下夕爾句集』（牧羊社刊）に「序」を発表。

八月、「愛誦詩集のこと」を〈新潮〉に発表。

十月、『場面の効果』を大和書房より、『黒い雨』を新潮社より刊行。『定本木下夕爾詩集』（牧羊社刊）に「序」を発表。

十一月三日、第二十六回文化勲章を受ける。母よりお祝の電話を受ける。『黒い雨』により、第十九回野間文芸賞を受賞する。／

『井伏鱒二』《日本の文学53》（《日本の文学 第53巻付録34》）に、河盛好蔵との対談「井伏文学の周辺」を収録）を中央公論社より刊行。米澤滋（電電公社総裁）との対談「釣 酒 文学 電話」が〈ダイヤル〉に掲載される。

十二月、阿佐ヶ谷会が青柳瑞穂邸で開かれ、瀧井孝作・河盛好蔵・河上徹太郎・中島健蔵・中野好夫・浅見淵らと共に出席する。島村利正が幹事をつとめる。第二十六回文化勲章受章の祝いと、亀井勝一郎の追悼を兼ねた会であった。

一九六七（昭和四十二年） 六十九歳

一月、「両家の争ひ」を〈小説新潮〉に、「御用控帳」を〈文藝春秋〉に、「鷗外の手紙」を〈新潮〉に、「出土品」を〈朝日新聞〉（三日）に、「正宗さん」を〈東京新聞〉（夕刊四日）に発表。『くるみが丘』《少年少女日本の文学11》をあかね書房より刊行。

二月、『井伏鱒二全集』（普及版）全十二巻を筑摩書房より刊行（四十三年一月）。

三月二十日、広島県深安郡加茂村粟根に於いて、母美耶、九十一歳の天寿を全うする。

四月、飯田龍太の招きにより、山梨県境川村において催された「雲母」全国俳句大会に永井龍男を伴って出席し、「あいさつ」をする。

五月、『井伏鱒二集』（日本文学全集41）を集英社より刊行。「憎めない“演技の人” 太宰治」（伊馬春部 井伏鱒二対談 連載対談71）が『週刊朝日』（19日）に掲載される。「佐藤先生」を『佐藤春夫全集』月報第6號に発表。

六月、「ウバメ樫」を『別冊文藝春秋』に、「あいさつ」を「雲母」（53巻）に発表。『井伏鱒二集』（日本文学全集19）を河出書房より刊行。

七月、「友達座連中」を『週刊新潮』に連載（十二月完結）する。

八月、「四十年前のこと」を『久保田万太郎全集』（中央公論社）第3巻月報に発表。九月、『井伏鱒二』（日本文学全集22）を新潮社より刊行。

十月、「日記」（のち「七月の日記」と改題）を『風景』に発表。『風貌・姿勢』を講談社より刊行。

十一月、『井伏鱒二集』（日本文学全集17）を河出書房より、『井伏鱒二』（現代日本文学館29）を文藝春秋社より刊行。

一九六八（昭和四十三年） 七十歳

一月、「大きい木」（のちに「大きな木」と改題）を『新潮』に、「飯田龍太の釣」を『俳句』に発表。「楽しき哉雑談―座談会 井伏鱒二・河盛好蔵・永井龍男―」が『中央公論』に掲載される。

二月、「文芸一夕話―座談会 井伏鱒二・井上靖・山本健吉・河盛好蔵―」が『心』に掲載される。

三月、『井伏鱒二・太宰治・木山捷平』（日本短編文学全集36）を筑摩書房より刊行。

五月十四日、「三田村鳶魚終焉之地」記念碑が西八代郡下部町、上の平不二ホテル内に建てられ、除幕式に出席し挨拶をする。／「かきつばた」が『全集・現代文学の発見』（学芸書林）5巻に、「白毛」が6巻、「吹越の城」が11巻、「さざなみ軍記」が12巻に収録される。

六月、「古い手紙『太宰治展』によせて」を〈毎日新聞〉(夕刊十七日)に発表。

七月、笛吹川を訪ねる。／「怖くて好きな富士」を〈文藝春秋〉に発表。

九月、飯田蛇笏展で甲府を訪れる。

十月、「さざなみ軍記」(新学社文庫)を新学社より刊行。

十一月、「宇野さんの魚釣」を『宇野浩二全集』(中央公論社)第4巻月報に発表。

十二月、「思ひ出すこと」を〈心〉に、「シンガポールで見た藤田嗣治」を〈芸術新潮〉に発表。

一九六九(昭和四十四)年 七十一歳

一月、「問はず語り」を〈小説新潮〉に、「富ノ沢鱗太郎」を〈新潮〉に、「舞台再訪・さざなみ軍記」を〈朝日新聞〉(二十七日)に発表。

二月、「風貌・姿勢」を〈産経新聞〉(夕刊)に連載(十一日～五月六日完結)する。

三月、「御金蔵破り」を〈中央公論〉に、「太宰治と岩田九一」を『太宰治集』〈新潮日本文学35〉月報に、「亀井勝一郎」を〈産経新聞〉(十八日夕刊)に発表。

四月、「編集のことば」を『河上徹太郎全集』内容見本(勁草書房)に、「三好達治」を〈産経新聞〉(八日夕刊)に、「風月翁」を森下雨村著『猿猴川』に(序文)を発表。『井伏鱒二』〈カラー版日本文学全集23〉を河出書房新社より刊行。

五月、「私の好きな詩一つ」を〈ちくま〉に発表。

六月、『ジョン万次郎漂流記』(ホームスクール版日本の名作文学34)を偕成社より刊行。英訳『黒い雨』(Black Rain シェン・ベスター訳)を講談社インターナショナルより刊行。「自然と文学」対談 井伏鱒二・深沢七郎」が〈文芸〉に、「魅せられたる富士座談会 井伏鱒二・武田泰淳・外川政雄」が〈潮〉に掲載される。

七月、「黒い雨」その他―対談 井伏鱒二・神保光太郎―が〈四季〉に掲載される。

八月二日、河盛好蔵との対談「緑蔭対談」がNHKラジオ第一放送より放送される(『井伏鱒二随聞』新潮社刊に収録)。

九月、「手控帳より」を〈海〉(四十五年一月続載)に発表。『夜ふけと梅の花』(新興芸術派叢書復刻版)を日本近代文学館より刊行。

十月、「器用・無器用」を『河上徹太郎全集』（勁草書房）第3巻月報に、「私の体験記」（のち「ヤマメ釣」と改題）を〈サンデー毎日〉（二十六日）に発表。『井伏鱒二』〈日本文学全集15〉を新潮社より刊行。

十一月、「戦後と漂流―対談 井伏鱒二・五木寛之―」が〈文芸〉に掲載される。

十二月、『山椒魚 遙拝隊長』（岩波文庫）を岩波書店より刊行。

一九七〇（昭和四十五）年 七十二歳

一月、「釣人」を〈新潮〉に、「羽織」を〈産経新聞〉（夕刊十日）に、「処女作まで」を『井伏鱒二集』〈新潮日本文学17〉（新潮社）月報に発表。『井伏鱒二集』〈新潮日本文学17〉を新潮社より刊行。

二月、「戦争中の徴員・平野直美」を〈文学界〉に、「芦田川・幻の町」（のち「川底の町」と改題）を〈日本経済新聞〉（二十六日）に発表。「失われゆく釣人たちの自然―対談 井伏鱒二・檜山義夫―」が〈潮〉に、「野鳥の話―対談 井伏鱒二・中西悟堂―」が〈赤旗〉（十五、二十七日）に掲載される。『定本侘助』（後記）を付すを青娥書房より刊行。

四月、「釣宿」を〈新潮〉に連載（六月）。「鳥の声」を〈野鳥〉に発表。『井伏鱒二』〈日本文学全集24〉を河出書房新社より刊行。六月、「田中さんのこと」（のちに「田中貢太郎先生のこと」と改題）を〈すばる〉に、「おしまいのページで・公害の心配」を〈オール読物〉に、「はしがき」を作品集『八月六日を描く』（文化評論出版）に発表。『釣人』『黒い雨』（新潮文庫）を新潮社より、『井伏鱒二・太宰治集』〈あかつき名作館日本文学シリーズ10〉を暁教育図書より刊行。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。

八月、高森で過ごす。／「釣る話―対談 井伏鱒二・開高健―」が〈ちくま〉に、『黒い雨』執筆前後―被爆25周年にあたって―（談話）が〈赤旗日曜版〉に掲載される。『井伏鱒二・上林暁集』〈現代日本文学大系65〉を筑摩書房より刊行。

九月、高森で過ごす。この年以後、毎年夏はここで過ごす。／「昭和十年代を聞く―井伏鱒二―」（インタビュー）が〈文学的立場〉に掲載される。「木山君の人がら」（木山みさ宛ハガキ）が『感恩集 木山捷平追悼録』（永田書房）に収録される。『井伏鱒二集』〈現代日本の文学21〉を学習研究社より、『河鹿』（復刻版）を筑摩書房より刊行。

十月、「入隊當日のこと」を『海音寺潮五郎全集』（朝日新聞社刊）月報十三に、「おしまいのページで・地方病」を〈オール読物〉

に発表。「思い屈した(一部対談―開高健・井伏鱒二)」が『人とこの世界』(河出書房新社)に収録される。

十一月、木山捷平詩碑が笠岡市城山公園に建てられ、除幕式に出席する。／「四十雀」を〈新潮〉に、「私の履歴書」(のちに「半生記―私の履歴書―」と改題)を〈日本経済新聞〉に連載(一日〜十二月二日)する。

十二月、「幼少年時代にどんな本を読んだか」(アンケート)が〈図書〉に掲載される。

一九七二(昭和四十六)年 七十三歳

一月、「木山捷平詩碑」を〈文学界〉に発表。

二月、「窓の外の自動車」を〈産経新聞〉(夕刊十九日)に発表。英訳短編集『遙拝隊長』(ジョン・ベスター英訳)を講談社インターナショナルより、『珍品堂主人』(ASBC版)を中央公論社より刊行。

三月十四日、阿佐ヶ谷会が開かれ、青柳瑞穂、中島健蔵、島村利正、村上菊一郎、河盛好蔵、外村繁等と集う。／「街のなかの森」(のちに「早稲田の森―街の中の森―」と改題)を〈新潮〉に発表。

四月、「武田文学の奥行き」を『武田泰淳全集』(筑摩書房)内容見本に発表。

五月、「メンコ―少年の縁起―」(のちに「メンコ」と改題)を〈新評〉に、「看板」を〈オール読物〉に発表。『定本 屋根の上のサワン』を牧羊社より刊行。

六月、「小沼君の将棋」を『青娥月報1「汽船」』に発表。

七月、「中込君の雀」を〈新潮〉に発表。『山椒魚・本日休診』(講談社文庫)を講談社より、『井伏鱒二』(日本文学全集15)を新潮社より刊行。

八月、「筆蹟」を〈オール読物〉に発表。『雁』の三つの場面が『森鷗外集』(新潮日本文学1)(新潮社)月報に収録される。

九月、『早稲田の森』を新潮社より刊行。

十一月、「うなぎ」を〈新潮〉に、「戦前戦後」を『追悼文集・大宅壮一と私』(季龍社)に発表。『くるみが丘』(少年少女日本の文学11)をあかね書房より刊行。「自然と文学―対談 深沢七郎・井伏鱒二」が『盲滅法 深沢七郎対談集』(創樹社)に収録される。十二月、「唐木先生」を〈オール読物〉に発表。『遙拝隊長』が『戦争文学全集4』(毎日新聞社)に収録される。

一九七二（昭和四十七）年 七十四歳

一月、「文学・閑話休題―対談 井伏鱒二・永井龍男―」が〈文芸〉（後に『永井龍男全集第11巻』講談社に収録）に掲載される。
二月、『早稲田の森』により第二十三回読売文学賞を受賞する。「青柳瑞穂と骨董」を〈文藝春秋〉に、「峠の茶店」を〈文学界〉に発表。「花の町」が『戦争文学全集2』（毎日新聞社）に収録される。
三月、「一握りの粉」を〈オール読物〉に、「嘗ての亡命客」を〈新潮〉に発表。「黒い雨」のこと（インタビュー）が〈国語通信〉に掲載される。

四月、永井龍男と共に盛岡を旅する。／「馬」を〈小説新潮〉に発表。

五月、「交遊抄」を〈日本経済新聞〉（四日）に発表。「山椒魚」まで―対談 井伏鱒二・河盛好蔵―」が『人と人影』〈現代日本のエッセイ〉（毎日新聞社）に収録される。『定本木下夕爾句集』（木下夕爾全集・牧羊社刊）に「序」が、『定本木下夕爾詩集』（木下夕爾全集・牧羊社刊）に「序」が再収録される。

七月、「約束」を〈オール読物〉に発表。

十月、「船津村の窯址」を〈新潮〉に発表。

十一月二十五日、阿佐ヶ谷会解散の会合が新宿の中国料理店「大東京飯店」で開かれる。青柳瑞穂の死去（昭和四十六年十二月十五日）により阿佐ヶ谷会の会場を失うこととなり、物故会員の血縁（亀井勝一郎、木山捷平、青柳瑞穂、夫人。外村繁、田畑修一郎、伊藤整、子息。）や友人を交えての総勢五十人の集まりをもって終結した。

十二月、伊豆熱海で冬を越す。このとき以降、ここで冬を越すことが多くなる。／「病気のいろいろ」（のちに「病気」と改題）を〈別冊文藝春秋〉に発表。『さざなみ軍記』（名作自選日本現代文学館）を、ほるぷ出版より刊行。

一九七三（昭和四十八）年 七十五歳

一月、「流星騒ぎ―その前後の私ごと」を〈群像〉に、「炬燵」を〈ほるぷ新聞〉（五日）に発表。
二月、「村のムクの木」を〈オール読物〉に発表。

三月、「私のうちの雑器と三家庭の雑器」(のちに「雑器」と改題)を〈太陽〉に、「岩崎栄―追悼」を〈毎日新聞〉(夕刊二十六日)に発表。『井伏鱒二集』(日本文学全集41)を集英社より刊行。

四月、「ハゼ類の魚」を〈オール読物〉に発表。

五月、永井龍男・河盛好蔵らと共に酒田へ旅をし、その折りに一人で佐藤三郎家を訪れ、上田秋成の断簡を見せてもらう。

六月、「天井裏の隠匿物」を〈新潮〉に、「庄野君と古備前」を『庄野潤三全集』(講談社)第1巻月報に、「児を盗む病」の周辺事を『志賀直哉全集』(岩波書店)第5巻月報に発表。「梅雨晴れ横町閑談」対談 井伏鱒二・永井龍男」が〈週刊小説〉(二十九日)に掲載される。

七月十五日、気心の知れた仲間とともに甲州を旅する会である「幸富講」の人々と甲州を訪れ、定宿である甲運亭に泊まる。此のころの会員は、「井伏さんを筆頭に、高原四部(元毎日新聞西部本社編集局長)、伴俊彦(アサヒグラフ編集長)、広瀬三郎(建築家)、濱谷浩(写真家)、宮内義治(宮うち・主人)、瀬尾政記(筑摩書房・井伏鱒二全集担当)、黒川路子(女流俳人)、金内薫、恵子(酒場・くろがね)と川島勝(「群像」編集部)。地元の甲府側からは飯田龍太(俳人)、詫間正一(宝石研磨業)さん等が参加した。」(『井伏鱒二』川島勝著)。「幸富講」の旅は此の後も続き、境川の飯田龍太郎訪問、武智温泉、三坂峠の天下茶屋等を訪れた。／「私事記」が『中村光夫全集』(筑摩書房)第14巻月報に収録される。

八月、「石垣」(詩)を〈オール読物〉に発表。「夕すずみ縁台話」対談 井伏鱒二・河盛好蔵」が〈潮〉に掲載される。

九月、杉並公会堂の敬老会に出席する。／「『雨月物語』明治翻刻本―佐藤古夢のこと―」を〈新潮〉に、「あら井の願法寺」を〈俳句とエッセイ〉に発表。『井伏鱒二』(アイボリーバックス〈日本の文学53〉)を中央公論社より刊行。

十月、「九月十二日記」を〈文芸展望〉に発表。

十一月、「太宰治と文治さん」を〈日本経済新聞〉(六日)に、「年譜に憑かれてゐた人」を『枕琴帖』(石原八束著附録 皆美社)に発表。

十二月、「釣談義・浮世問答」対談 井伏鱒二・開高健―捨てたつもりの煩惱が山奥までついてくる」が〈別冊文藝春秋〉に掲載される。

一九七四（昭和四十九）年 七十六歳

一月、「質流れの島」を〈新潮〉に、「虹のいろいろ」を〈雲母〉に、「川で会った人たち」を〈オール読物〉に、「開高夫人からの問書」を『開高健全作品小説4』（新潮社）月報に発表。「文学青年襄れ―『あの日この日』の周辺事―対談 井伏鱒二・尾崎一雄―」が〈群像〉に掲載される。

二月、「人違ひ」を〈文藝春秋〉に発表。

三月、「おしまいのページで・小黒坂の猪」を〈オール読物〉に発表。「姫谷厘釜蓋」が『日本のやきもの』（読売新聞社）に収録される。『井伏鱒二全集』（増補版 全十四巻）を筑摩書房より刊行（五十年七月完結）。

四月、「天井裏の隠匿物」が『文学 一九七四』（講談社）に収録される。

七月、「惜しい人」を執筆（十月、『回想の古田晃』筑摩書房に収録・後「古田晃」と改題）。『小黒坂の猪』を筑摩書房より刊行。

九月、『天井裏の隠匿物』（特別限定版）を槐書房より刊行。

十月、「スガレ追ひ」を〈文芸展望〉に断続分載（五十年一月・十月、五十一年一月・四月）を始める。「惜しい人」（のちに「古田晃」と改題）を『回想の古田晃』（筑摩書房刊）に発表。

十二月、「蟻地獄」を〈オール読物〉に発表。『保元物語・平治物語・義経記』（日本の古典14）（高木卓共訳 岩波書店）を河出書房新社より刊行。「志賀直哉宛昭和四十四年十月一日付書簡」が『志賀直哉全集』（岩波書店）別巻志賀直哉宛書簡に収録される。

一九七五（昭和五十）年 七十七歳

一月、岡山県牛窓で正月を過ごす。牧野信一の文学碑建設の趣意書と賛助者の言葉を書く。／「スガレ追ひ」を〈文芸展望〉に断続分載する。「肇さんのこと」を〈新潮〉に、「湖水の鮎」を〈文藝春秋〉に、「誤診」（詩）を〈小説新潮〉に発表。「地理・歴史・文学―対談 井伏鱒二・河上徹太郎―」が〈文芸〉に、「食べもの本来の味覚を語る―対談 井伏鱒二・深沢七郎―」が〈週刊小説〉（十日・十七日合併号）に掲載される。

二月、「牧野信一の文学碑」を執筆。

四月、「質流れの島」が『文学 一九七五』（講談社）に収録される。

六月、「備前牛窓」を〈新潮〉に発表。

七月、「大山康晴激闘十番勝負 第七回大山・花村戦 解説井伏鱒二」を〈週刊サンケイ〉(七月三日号)に発表。

十月、「スガレ追ひ」を〈文芸展望〉に断続分載する。「楯の会事務所のこと」(のちに「事務所のこと」と改題)を〈小説新潮〉に、「桂又三郎の履歴」を『日本のやきもの8 備前』(講談社刊)に発表。『山椒魚』(ジュニア版日本の文学48)を集英社より刊行。十二月、「おしまいのページで・天馬の馬糞石」(のちに「開高健」と改題)を〈オール読物〉に、「谿三彩亭」を〈薈〉に発表。

一九七六(昭和五十一年) 七十八歳

一月二十一日、牧野信一四十年忌に当り、小田原城址内に文学碑が建立され、除幕式に参列する。／「スガレ追ひ」を〈文芸展望〉に断続分載する。「新倉掘貫」(のちに「岳麓点描」と改題)を〈海〉に連載(五十二年一月完結)する。「問合はせの手紙二通」を〈新潮〉に、「好きな詩」を〈俳句とエッセイ〉に、「炬燵の話」を〈毎日新聞〉(夕刊六日)に発表。『屋根の上のサワン』(ジュニア版日本の文学16)を金の星社より刊行。

二月、「句集原稿のこと」を〈俳句〉に、「角川源義句集」を〈俳句〉に発表。「現代文学とことば―2―」(インタビュー)が〈言語生活〉に掲載される。

三月、「趣意書についての弁・牧野信一氏」(のち「牧野信一の文学碑」と改題)が『サクラの花びら』(牧野信一の文学碑を建てる会)に収録される。

三月、永井龍男と共に雪の新潟を旅する。

四月六日、作品「新倉掘貫」の取材を兼ねて甲府を訪れ、甲運亭に飯田龍太、三浦哲郎、深沢七郎らと集う。／「スガレ追ひ」を〈文芸展望〉に断続分載する。「会話を生かした文章」を〈波〉に発表。

五月、『井伏鱒二集』(現代文学大系44)を筑摩書房より刊行。

六月、『井伏鱒二の自選作品』(現代十人の作家4)を二見書房より刊行。

七月、「軍歌『戦友』」を〈新潮〉に、「土佐の高知で」を『街 もりおか』に発表。

八月、「詩魂の人」を『中野重治全集』(筑摩書房)内容見本に発表。

九月、『山椒魚』（限定版）を成瀬書房より刊行。
十一月、「序」を『渡し舟』（角川書店）に発表。

一九七七（昭和五十二）年 七十九歳

一月、「盤無し将棋」を〈東京新聞〉（夕刊四日）に発表。
二月、「序文」が『碓伊之助作品集』（溪水社）に収録される。
三月、『スガレ追ひ』を筑摩書房より刊行。
四月、永井龍男と共に瀬戸内海の六口島を訪ねる。釣りと将棋の旅であった。本格的な釣りはこの時を最後にして止める。／「蜜柑の木」を〈雲母〉に発表。「軍歌『戦友』」が『文学 一九七七』（講談社）に収録される。
五月、「冬」（詩）を〈海〉に発表。
六月三日、出雲橋の「はせ川」の店じまいのための会に河上徹太郎・中島健蔵、永井龍男等と出席する。「はせ川文人同窓会」はこれを以て終わる。

七月、三原の糸碓神社へ彫刻家の今城国忠や小林忠司（小林旅館主人）らと訪ねる。／「瀬戸内海で釣りを楽しんだ」対談 井伏鱒二・永井龍男」が『目で見る「釣魚大全」』（文藝春秋デラックス）に掲載される。「軍歌『戦友』」（集英社文庫）を集英社より、『珍品堂主人』（中公文庫）を中央公論社より、『定本 厄除け詩集』を筑摩書房より刊行。

八月、「三好達治の河童の暖簾」を〈波〉に、「茶山詩三百首」を読むを〈ちくま〉に、「徴員時代の堺誠一郎」を堺誠一郎著『キナルバの民』（中公文庫）に発表。

九月、「徴用中のこと」を〈海〉に毎号連載（五十五年一月、前編終）する。「戦争と人と文学」座談会 井伏鱒二・中島健蔵・巖谷大四」が〈太陽〉に掲載される。

十二月、「遊」（インタビュー）が『作家の文体』（筑摩書房）に掲載される。

一九七八（昭和五十三）年 八十歳

一月、「野生の鴨―兼行寺の池(1)―」を〈新潮〉に発表。

二月、「母屋の法事―兼行寺の池(2)―」を〈新潮〉に発表。

三月、「校歌と踊―兼行寺の池(3)―」を〈新潮〉に発表。

四月、「兼行寺の池」を〈新潮〉に発表。

五月、「統兼行寺の池」を〈新潮〉に発表。

六月、群馬県権田村東漸寺小栗上野介の墓を訪ね遺跡取材する。

七月、『本日休診』が舞台化され帝国劇場で上演される。／『ドリトル先生アフリカゆき』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)を岩波書店より刊行。

九月、『ドリトル先生航海記』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)を岩波書店より刊行。

十月、永井龍男・河盛好蔵らと共に京都を旅する。

十一月、「文化の日特別座談会」(東京12チャンネル)に永井龍男・河盛好蔵・今日出海と共に出演する。／「無常の風」を〈潮〉に発表。『ドリトル先生のサーカス』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)、『ドリトル先生の郵便局』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)を岩波書店より、『井伏鱒二自選集』を集英社より刊行。

一九七九(昭和五十四)年 八十一歳

一月、『ドリトル先生航海記』(ロフティング・井伏鱒二訳 講談社文庫)を講談社より刊行。

二月、『HYOTAN』を〈新潮〉に、「十一屋の若旦那」(のちに「甲斐路の麦酒醸造家十一屋の若旦那」と改題)を〈オール読物〉に発表。『ドリトル先生の動物園』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)を岩波書店より刊行。

六月、小林秀雄の「三大新潮社賞」受賞パーティに大岡昇平らと共に出席する。／『井伏鱒二』(新潮現代文学2)を新潮社より刊行。

九月、サントリー山梨ワイナリーへ小林秀雄・那須良輔らと共に訪れる。／『ドリトル先生と月からの使い』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)、『ドリトル先生と月へゆく』(ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫)、『ドリトル先生月から帰る』(ロ

フティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）を岩波書店より刊行。「公害の心配」「地方病」「唐木先生」「約束」「村のムクの木」「石垣」「小黒坂の猪」「天馬の馬糞石」が『おしまいのページで』（文藝春秋社 文藝春秋社編）に収録される。

十月、『ドリトル先生と緑のカナリヤ』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）、『ドリトル先生の楽しい家』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）、『ドリトル先生と秘密の湖 上』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）、『ドリトル先生と秘密の湖 下』（ロフティング・井伏鱒二訳 岩波少年文庫）を岩波書店より刊行。「書くのは愉し 対談井伏鱒二・三浦哲郎」が〈波〉に掲載される。

十二月、「海揚り」を〈新潮〉に発表。

一九八〇（昭和五十五年）年 八十二歳

二月、「マタタビ」を〈文藝春秋〉に発表。

四月、『定本 さざなみ軍記』を作品社より刊行。

五月、「博多の旦那」を『読書と私―書下しエッセイ集』（文春文庫）に発表。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。

八月、高森で過ごす。

九月、河上徹太郎が死去（二十二日）し、その通夜に大岡昇平・石川淳らと共に列席する。／「御隠居」を〈オール読物〉に発表。「白毛」「夜ふけと梅の花」が『現代日本のユーモア文学Ⅰ』（立風書房）に収録される。

十月十九日、午後九時六分「黒い雨」のモデルとなった重松静馬（作中 閑間重松）が腎盂腫瘍のため広島県小畑村の自宅で死去する、享年七十七歳。「生きているのが悪いような気もしている」という、重松静馬追悼のコメントがサンケイ新聞（二十一日）に掲載される。

十一月、「上林暁を悼む」を〈すばる〉に、「作品』のころ」を〈作品〉に発表。

十二月、「追悼河上徹太郎終焉の会」を〈新潮〉に発表。

一九八一(昭和五十六)年 八十三歳

一月、「木山捷平の詩と日記」を〈小説新潮スペシャル〉(冬号)に、「永井龍男の作品」を『永井龍男全集』内容見本(講談社)に発表。

二月、「豊多摩郡井荻村」(のちに「荻窪風土記」と改題)を〈新潮〉に毎月連載(五十七年六月、完結)する。

三月、「解説 小林秀雄の随筆作品」を『小林秀雄集』〈現代の随想5〉に発表。井伏鱒二編『小林秀雄集』〈現代の随想5〉が弥生書房より刊行される。

四月、『Salamander and Other Stories』(ジョン・ベスター英訳)を講談社インターナショナルより刊行。

七月、長野県富士見町高森の家で過ごす。

八月、高森で過ごす。「黒い雨」の井伏鱒二氏に聞く「核の現状況「不愉快だな」(インタビュー)が〈毎日新聞〉(夕刊三日)に掲載される。

九月、高森で過ごす。

十月、『海揚り』を新潮社より刊行。

十二月、「核戦争の危機を訴える文学者の声明」の呼びかけ人の一人となる。

この年、「福原の麟さん」を『福原麟太郎随想全集』(福武書店)内容見本に発表。

一九八二(昭和五十七)年 八十四歳

一月、「神谷宗湛の残した日記」を〈海燕〉に連載(九月完結)。

三月、「紅葉と美妙」を〈オール読物〉に発表。「文学閑話休題」対談 井伏鱒二・永井龍男―が『永井龍男全集』(講談社)第11巻に収録される。『正宗白鳥全集』(福武書店刊)の内容見本に「秋聲と白鳥」を寄せる。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。／『井伏鱒二集』〈現代の随想17〉を弥生書房より刊行。

八月、高森で過ごす。／「木山捷平 序にかへて」(「木山捷平の記と日記」の再録)が『歌文集 台所から見た文壇』(三茶書房)に収録される。

九月、高森で過ごす。

十月、メニエル病にかかる。

十一月、メニエル病の療養のため、山梨県石和温泉の「糸柳」旅館に夫人と二人で翌年二月まで滞在する。平等川が見える二階の十畳間に滞在した。／『荻窪風土記』を新潮社より刊行。「雨」を〈波〉に発表。

一九八三年（昭和五十八）年 八十五歳

一月、『俳句とエッセイ』を牧羊社より刊行。「片隅の昭和史―『荻窪風土記』の周辺―対談井伏鱒二・安岡章太郎」が〈新潮〉に掲載される。『さざなみ軍記』を福武書店より刊行。

四月、「天才の証人―『人形』その他―」を〈新潮〉（臨時増刊小林秀雄追悼記念号）に発表。『遙拝隊長・本日休診』を社会福祉法人埼玉福祉会より刊行。

五月、山梨県の清春白樺美術館を訪れる。このとき以降、「幸富講」の人達と春にはここを訪れる。「幸富講は新しい装いで出発することになった。メンバーは飯田龍太、安岡章太郎、三浦哲郎、広瀬三郎、矢口純、吉岡達夫、田沼武能、寺田博、高野正雄、松本武夫、黒川路子の諸氏に出版関係の人たちが随時ゲストとして参加して、総勢十名ほどのこちらもちんまりした旅行会である。古い革袋に新しい酒を注ぐといった趣きで、春は清春芸術村や白洲のサントリ―工場の桜見物の後、甲府湯村の常盤ホテルに一泊するのがお決まりのコースであった。」（『井伏鱒二』川島勝著）。

六月、「追悼・尾崎一雄―下曾我の御隠居―」を〈新潮〉に発表。

七月八日、『尾崎一雄を偲ぶ会』が丸の内の山水樓で開かれ、安岡章太郎、遠藤周作らの発起人の一人として出席する。／「鞆ノ津日記」を〈海燕〉に連載（六十年八月完結「五十九年五月―六十年三月休載」のちに『鞆ノ津茶会記』と改題）。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。

八月、高森で過ごす。「ドラマスペシャル 黒い雨―姪の結婚」（森繁久彌、奈良岡朋子、中井貴恵、脚本：高橋玄洋）が日本テレビで放送される。／「紅葉と美妙」が『耳ぶくろ』文藝春秋社に収録される。

九月、高森で過ごす。

十月、NHK特集「井伏鱒二の世界」が放映される。

十一月、「井伏鱒二―人生飄々―」がNHKより放映される。

この年、「秋聲と白鳥」を『正宗白鳥全集』（福武書店）内容見本に発表。

一九八四（昭和五十九）年 八十六歳

一月、「旧・笛吹川の趾地」を『新潮』に、「大月の岩殿山」を『文学界』に発表。「酒について 井伏鱒二 矢口純インタビュウ」が『新潮45+』に掲載される。

四月、「飯田家の池」を『森澄雄・飯田龍太集』（朝日文庫）に発表。

五月、「井伏鱒二聞き書き 萩原得二インタビュウ」が『潮』に掲載される。

六月、「井伏鱒二聞き書き 萩原得二インタビュウ」が『潮』に掲載される。「いい作品一つ書けば全集いらぬ」（日本の百人）

が『日本経済新聞』（夕刊四日）に掲載される。

七月、黄瀛の来日を歓迎する会が「山の上ホテル」で開かれ、出席する。下旬から長野県富士見町高森で過ごす。／「井伏鱒二聞き書き 萩原得二インタビュウ」が『潮』に掲載される。

八月、高森で過ごす。／『さざなみ軍記』をほるぶ出版より刊行。

九月、高森で過ごす。／『定本 夜ふけと梅の花』を永田書房より刊行。

十月、「幸富講」の会の一人であった貴石工芸作家・宅間正一の遺作展を訪れる。／「追悼・今日出海 同人雑誌の頃」を『新潮』に発表。「井伏鱒二聞き書き 萩原得二インタビュウ」が『潮』に掲載される。

十二月、右眼白内障のため、東京慈恵会医科大学附属第三病院で手術をうける。／『特集 井伏鱒二』が『早稲田文学』より刊行される。

一九八五（昭和六十）年 八十七歳

一月、「文学七十年―対談 井伏鱒二・河盛好蔵」が『海燕』に掲載される。『焼物雑記』を文化出版局より刊行。

二月、「困るんだ、酒がうまくて―賢師歴談1―対談 井伏鱒二・辺見じゅん」が〈諸君！〉に掲載される。

三月二五日、第一回早稲田大学芸術功労者賞を受け、早稲田大学記念会堂に於いて受賞式が行われる。風邪のため三浦哲郎が代理として出席する。「早稲田大学芸術功労者賞記念 井伏鱒二展」が早稲田大学演劇博物館に於いて開催される。

四月三日、「早稲田大学芸術功労者賞記念井伏鱒二展」の見学に訪れる。「幸富講」の旅で清春白樺博物館へ、飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎や編集者等と共に訪れる。五月、「昭和初期の作家たち」（対談 安岡章太郎）が〈三田文学〉に掲載される。

六月、「井伏鱒二氏に聞く 岡田幸一インタビュー」が〈早稲田学報〉に掲載される。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。

八月、長野県富士見町高森で過ごす。

九月、「正宗さんのリックサック」を〈海燕〉に発表。

十月、三浦哲郎の大仏次郎賞受賞の式に出席する。『井伏鱒二自選全集』（全十二巻・補巻一・新潮社）の刊行が始まる。『井伏鱒二自選全集』一卷に収録の「山椒魚」の終章部（山椒魚と蛙との和解部分）の作者自身による削除に対して、野坂昭如の連載記事「窮鼠のたか跳び」〈週刊朝日〉（二十五日号）で「井伏鱒二先生に―小説『山椒魚』の改変に異議あり」と述べる。／「完成」へあくなき執念『自選全集』スタート」が〈毎日新聞〉（夕刊十一日）に、「井伏鱒二の文学的情熱」が〈サンデー毎日〉（十月二十七日号）に、「山椒魚」だけじゃない井伏鱒二氏の自作彫琢」が〈週刊新潮〉（十七日号）に、「自選を終えて―対談 井伏鱒二・河盛好蔵」が〈波〉に掲載される。『日本の名随筆36』（井伏鱒二編、「手紙のこと抄」収録）を作品社より刊行。

十一月、「第一回早稲田大学芸術功労者賞記念 井伏鱒二・小沼丹・三浦哲郎展」（十一日―十六日）が丸善日本橋店に於いて開催される。／『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

一九八六（昭和六十二）年 八十八歳

一月、「たらちね」を〈新潮〉に、「賭」を『尾崎一雄全集』（筑摩書房）15巻月報に発表。『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

二月、「不思議なこと」を〈小説新潮〉に発表。『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。「新春無題気儘対談―桃の花、浅草結び、山椒魚―対談 井伏鱒二・深沢七郎」が〈新潮〉に掲載される。

三月十四日、横田瑞穂（露西亞文学者 二月十九日死去）の追悼の会が大隈会館で行われ、新庄嘉章、小沼丹、五木寛之、後藤明生等の発起人の一人として出席する。（出席三浦哲郎、原卓也、江川卓等）／『鞆ノ津茶会記』を福武書店より刊行。『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

四月二十七日、『幸富講』の旅で青春白樺博物館へ飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎や編集者等と共に訪れ、甲州湯村温泉・常盤ホテルに宿泊する。／『岳麓点描』を彌生書房より刊行する。『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

五月、「対象を見る目 新潮日本文学アルバム『小林秀雄』」を『新潮』の「本の欄」（書評）に、「安岡君の短編」を『安岡章太郎集』内容見本に発表。『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。／「原発事故のこと」を『新潮』に発表。『走れメロス・山椒魚』〈少年少女日本文学館12〉を講談社より刊行。「緑蔭対談」（NHKラジオ第一放送昭和四十四年八月二日）が『井伏鱒二随聞』（河盛好蔵著、新潮社刊）に収録される。『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

八月、長野県富士見町高森で過ごす。二十三日～二十五日、『幸富講』の旅で、青春白樺博物館へ飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎や編集者等と共に写生旅行に行く。／『井伏鱒二自選全集』を新潮社より刊行。

九月、長野県富士見町高森で過ごす。

十月、著者自らが作品を厳選し、削除、加筆、修正を行った、著者による決定版である『井伏鱒二自選全集』（新潮社刊）全十二巻補巻一が完結する。「井伏鱒二―人生飄々―」のビデオテープが新潮社より発売される。

十二月、荻窪「東信閣」に於いて忘年会が開かれ、飯田龍太、三浦哲郎、等の『幸富講』の人々や、水上勉、山口瞳、それに編集者等五十人余りが共に集う。

一九八七（昭和六十二）年 八十九歳

一月一日、河盛好蔵、三浦哲郎、天狗太郎、川島勝、矢口純、松本が集う。二十七日、日本橋三越で開催の「富岡鉄斎展」を見る。

『朝日新聞』（一日）に「ひと・井伏鱒二さん」が掲載される。『新潮カセットブック「井伏鱒二」』（「山椒魚」「屋根の上のサワン」「鯉」「乗合自動車」「石地蔵」「蛙」収録）が新潮社より発売される。

四月二十一日、「幸富講」の旅で、清春白樺博物館へ飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎や編集者等と共に訪れ、甲州湯村温泉に宿泊する。／『昭和文学全集10』が小学館より刊行される。

五月十二日、取材のため、伊豆の戸田・下田を訪れる。二十八日、二男大助氏死去（五十二歳）する。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。／「瑞々しさと余韻」を『三浦哲郎自選全集』（新潮社刊）の内容見本に発表。

八月、長野県富士見町高森で過ごす。／「中浜万次郎」を『海燕』に連載を始める。

九月、長野県富士見町高森で過ごす。／「中浜万次郎」を『海燕』に連載する。「普門院の和尚さん」の執筆にかかる。「僕は書くしかない」対談 井伏鱒二・三浦哲郎が『波』に掲載される。

十月二十一日、左眼白内障のため、東京慈恵会医科大学附属第三病院で手術をうける。／「中浜万次郎」を『海燕』に連載する。

十一月十七日、歌舞伎座を松本と訪ね「菊池寛生誕百年記念『屋上の狂人』」を観劇する。十二月、荻窪「東信閣」に於いて「幸富講」の仲間等による忘年会が開かれ、出席する。

一九八八（昭和六十三）年 九十歳

三月八日、「トートーという犬」の挿絵を描いた「白根美代子展」が東京セントラル絵画館で開かれ、「幸富講」の仲間と共に訪れる。／「中浜万次郎」を『海燕』に再連載（四月最終回）する。

四月十五日十六時、「春の会」が荻窪「東信閣」に於いて開かれ、安岡章太郎・三浦哲郎や「幸富講」の仲間と共に集う。／「中浜万次郎」の『海燕』への連載を終える。『トートーという犬』を牧羊社より刊行。「三毛猫のこと」（「荻窪風土記」の一部）が『高校生のための小説案内』（筑摩書房）に収録される。

五月、「雷鳥」を『新潮』（創刊1000号記念特大号）に発表。古木鐵太郎全集第一巻『古木鐵太郎全集』刊行の会に出席する。

六月、（六日）映画「黒い雨」の撮影が岡山県和気郡吉永町八塔寺で行われる。

七月、長野県富士見町高森で過ごす。／「薪の焰（飯田龍太 人と作品）」を『アサヒグラフ増刊 俳句入門』（二十日号）に発表。

八月、長野県富士見町高森で過ごす。／「普門院の和尚さん」を『海燕』に発表。「わが住まい方の記」が『太陽・特集 日本建築の再発見』に掲載される。

九月、長野県富士見町高森で過ごす。

十月十二日、姉セン（泉や泉子とも記す）広島にて死去する。

十一月、（二十一日）映画「黒い雨」の撮影が再度、岡山県和気郡吉永町八塔寺で行われる。

十二月、「井伏鱒二に聞く 萩原得二インタビュー」が〈中央公論〉（文芸特集）に掲載される。

一九八九（昭和六十四・平成元年）年 九十一歳

一月一日、三浦哲郎や『幸富講』の仲間が集う。／「桜の園」を〈海燕〉（新年特大号）に発表。

二月、「私の道」（聞き書き栗栖武士郎）が〈中国新聞〉（十五日）三月二十一日）に連載される。

三月、「大岡昇平と宮入貝」を〈新潮〉に発表。「文学者の証言 昭和を送る・対談 井伏鱒二、安岡章太郎」が〈新潮〉に掲載される。

五月、「阿佐ヶ谷界隈の文士展―井伏鱒二と素晴らしき仲間たち―」（二日）三十一日）が杉並区立郷土博物館で開催される。十一日、甲州湯村温泉に旅し、宿泊する。和歌山県新宮市に建つ「佐藤春夫顕賞記念館」設立の発起人の一人となる（二十二日）。映画「黒い雨」（今村昌平監督・北村和夫・田中好子主演）が東映系で上映される。

六月二十九日、赤門アビタシオンを松本と訪ね「へんろう宿」の「独り語り」（高木孝子、「真夏座」所属）を長谷川泉等と共に聞く。／「黒い雨」を語る―対談 井伏鱒二・今村昌平」が〈月刊ASAHI〉（六月創刊号）に掲載される。

七月、広島県名誉県民となる。

八月、「黒い雨」あとさき―対談 井伏鱒二・新井満」が〈すばる〉に掲載される。

九月一日、映画「黒い雨」を新宿東映パラスで見る。長野県富士見町高森で過ごす。（十日）二十八日）

十月九日、「利休」（勅使河原宏監督・三国連太郎・山崎努主演）を新宿松竹セントラルで見る。二十五日、銀座「おかだ」に安岡章太郎・三浦哲郎等『幸富講』の人々や編集者等と共に集う。

十一月、東京慈恵会医科大学附属第三病院に一週間入院し健康診断を受けたが、異常無く健康体であった。／「太宰治」を筑摩書房より刊行する。

一九九〇（平成二）年 九十二歳

一月、元旦 安岡章太郎・三浦哲郎や『幸富講』の仲間が集う。

二月、『二人の話』（限定二十部・「二つの話」の改題）を成瀬書房より刊行。『人と人影』（講談社文芸文庫）を講談社より、『七つの街道』を永田書房より刊行。「鮎の秘密」を『悠々として急げ』に収録。二十五日、「ぶらり日本名作の旅『荻窪風土記』」が日本テレビで放送される。

四月十五、十六日、清春白樺博物館へ飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎や『幸富講』の人々と共に訪れ、甲州湯村温泉に宿泊する。（二十日）『三浦哲郎さんを祝う会』が東京会館で開かれ、発起人（小沼丹・飯田龍太・安岡章太郎・大江健三郎・庄野潤三／当日欠席）の一人として出席し、乾杯の音頭をとる。／『漂民宇三郎』（講談社文芸文庫）を講談社より刊行。〈オール讀物〉（創刊60周年記念特別号・創刊号復刻特集）

五月、『定本 厄除け詩集』（限定千部 奥村土牛画）を牧羊社より刊行。

六月二十六日、長野県富士見町高森に行く。／「琴の記」が〈新文芸読本〉に掲載される。

七月、高森に飯田龍太・安岡章太郎や『幸富講』の人々等が訪れる。

八月、長野県富士見町高森で過ごす。二十一、二十二日、長野県南佐久（井出家宿泊）を旅し、『井伏鱒二自選全集』装画の「奥村土牛記念美術館」（八千穂村）を訪れる。／『雞肋集／半生記』（講談社文芸文庫）を講談社より刊行。「対談」ヤマメがやっぱり一番だ 井伏鱒二・萩原得二（「まぼろしの釣師」三浦哲郎・「奥技はるかなり」飯田龍太等を収録）が『水の趣味』に掲載される。

九月、長野県富士見町高森で過ごす。二十六日、鈴木都知事が荻窪の井伏家を訪ねる。／『川釣り』（岩波文庫）を岩波書店より刊行。

十月一日、（十一時から十四時）上野精養軒において、今年度の東京都名誉都民として顕彰される。（九月二十二日予定）／『晩春の旅・山の宿』（講談社文芸文庫）を講談社より刊行。

十一月八日、（十三時～五時）〈海燕〉新年号「永井龍男 折々のことー井伏鱒二・松本武夫インタビュー」のためのインタビューを荻窪「東信閣」で行う。／「佛蘭西人形」（大伴勝子著・講談社刊）に序文を載せる。

十二月二十八日、飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎等が荻窪の井伏家を訪ねる。

一九九一(平成三)年 九十三歳

一月四日、井伏宅に三浦哲郎や「幸富講」の人々が集う。／「永井龍男 折々のこと―井伏鱒二・松本武夫インタビュー」が『海燕』新年号に掲載される。

二月十四日、先生を囲む会が荻窪「東信閣」に於いて開かれ、小沼丹・三浦哲郎や「幸富講」の人々と共に集う。

四月九日、飯田龍太・安岡章太郎・三浦哲郎や「幸富講」の人々と共に青梅市御岳の「河鹿園」を訪れる。／『文士の風貌』を福武書店より刊行。「東京の雑木林」(矢口純・福武書店刊)の帯文を載せる。

五月四日、マンフレート・オステン氏(ドイツ連邦共和国大使館、一等参事官)が表敬訪問し、三浦哲郎、松本も同席する。

六月十日、都立水元公園の菖蒲を夫人と共に観賞する。

七月、「なだれ」が『山の詩集』筑摩書房に収録される。

八月一日、長野県富士見町高森に行く。八・九日、高森に安岡章太郎・三浦哲郎や「幸富講」の人々が訪れ、「ペンション北欧」で共に集う。

九月十八日、「サライ」十一月七日号 井伏鱒二特集」のインタビュー(三浦哲郎・松本同席)を受ける。三十日、テレビ番組「そこが知りたい」のインタビューを受ける。

十月七日、「秋の会」が荻窪「東信閣」に於いて開かれ、小沼丹・安岡章太郎や「幸富講」の人々と共に集う。長男、井伏圭介作品展(日本橋三越本店六階特選画廊・二十九日―十一月四日)を訪れる。／「葉煙草」が『早稲田文学』(創刊100周年記念特別号)に掲載される。『開高健全集』(新潮社刊)の内容見本に「心の森林浴」の文を寄せる。

十一月、「井伏鱒二特集」が『サライ』十一月七日号に掲載される。「最後の鎌倉文士 永井龍男 追悼」(別刷 かまくら春秋)に「風貌・姿勢―永井龍男―」(『作品』昭和五年十月)が収録される。

一九九二(平成四)年 九十四歳

一月二日、小沼丹らが訪れる。

二月、『白鳥の歌・貝の音』（講談社文芸文庫 解説小沼丹）を講談社より刊行。

四月十日、善福寺公園（杉並区）の桜を見る。

五月、『たらちね』を筑摩書房より刊行。

六月、△アサヒグラフ別冊『井伏鱒二の世界』▽が朝日新聞社より刊行される。『山椒魚』（限定二千部）を牧羊社より刊行。

八月、諏訪大社上社（諏訪）、諏訪大社下社（茅野）の両大社を訪ねる。

十月、『還暦の鯉』（講談社文芸文庫）を講談社より刊行。

十二月二十八日、荻窪「くろがね」に於いて、安岡章太郎、三浦哲郎や編集者等の「幸富講」の人々が共に集う。／「今日今日記」俳句と女史のアルバイト船（雲母）が△アサヒグラフ別冊平成俳壇・歌壇に再録される。

一九九三（平成五）年 九十五歳

一月二日、三日、小沼丹、河盛好蔵らが挨拶に訪れる。

二月六日、『井伏鱒二とふるさと』が広島テレビで放送される。

三月、「徴用時代の堺誠一郎」が『菩提樹への道』（堺誠一郎著彌生書房刊）に収録される。

四月、『井伏鱒二 対談集』を新潮社より刊行。

六月二十四日、東京衛生病院（杉並区天沼）へ救急入院する。／『文士の風貌』（福武文庫）を福武書店より刊行。

七月十日、午前十一時四十分、同病院にて死去。十一日、午後六時より、同病院敷地内の同系列の天沼教会（セブンスデー・アドベント教会）に於いて通夜がおこなわれ、十二日午前十二時より同教会で密葬が執り行われる。文壇、出版界等や氏を忍ぶ多くの人達が参列。桐が谷斎場へ向う。

天皇より祭司料が供せられ、従三位に叙せられる。

戒名 照観院文壽日慧大居士

そのお墓は、東京北青山の速栄山持法寺の境内にある。

七月十三日、「井伏さんをしのんで」(NHK教育テレビ)が放送される。十六日(初七日)、六十有余年に渡り住みなれた杉並区の区長より、「感謝状」が届けられる。／「追悼 井伏鱒二氏逝く―「サヨナラ」ダケガ人生ダ」(アサヒグラフ)より刊行される。

八月、「名作をテレビで読む『屋根の上のサワン』」がNHKテレビ衛星第二で放送される。

九月、「井伏鱒二追悼」が『海燕』に、「追悼・井伏鱒二」が『文学界』に、「追悼・井伏鱒二」が『群像』に、「追悼特集・井伏鱒二」が『新潮』に、「追悼・井伏鱒二」が『すばる』に、「追悼特集・さようなら井伏鱒二さん」が『オール読物』に、「追悼・井伏鱒二」が『ちくま』に掲載される。「井伏鱒二特別回顧展」(九月十五日～六年一月三十一日)が吉備路文学館に於いて開催される。

十月、『点滴・釣鐘の音』(講談社文芸文庫)が講談社より、『釣師・釣場』(復刻 新潮文庫)を新潮社より刊行される。十日、『井伏鱒二―人と文学―』(証言者 阿川弘之・飯田龍太・今村昌平・小沼丹・大岡信・河盛好蔵・安岡章太郎・松本・他)がNHKテレビ衛星第二で放送される。

十月、「文芸春秋」に小沼丹執筆の井伏鱒二追悼文が掲載される。

十二月六日、「井伏鱒二さんを偲んで、『遙拝隊長』」がNHKラジオ第一放送(ラジオ深夜便・ドラマアワー)で放送される。

二十五日、二十六日、甲府湯村常盤ホテルに安岡章太郎、飯田龍太らの『幸福講』の人々が集う。

一九九四(平成六)年

一月、「追悼 井伏鱒二展」が早稲田大学大隈記念室で開催(十日～三十一日)される。『黒い雨』を監督した今村昌平の講演会も催される。

三月、「日本名作ドラマ『本日休診』」がテレビ東京で放送される。

四月、『厄除け詩集』(講談社文芸文庫)が講談社より刊行される。

六月、特装版『厄除け詩集』(講談社文芸文庫)が講談社より刊行される。『特集 井伏鱒二』が『解釈と鑑賞』(至文堂)に掲載される。『新潮日本文学アルバム 井伏鱒二』が新潮社より刊行される。

七月、『かきつばた・無心伏』(新潮文庫)が新潮社より刊行される。「井伏鱒二追悼特別展」(二日～三十一日)が杉並区立郷土博物館

館で開催され、講演も催される。

十一月、福山市名誉市民井伏鱒二追悼一周年事業「井伏鱒二の世界」展が、ふくやま美術館で開催される。二十日、「井伏鱒二の世界」展にともない、「井伏鱒二さんを偲ぶ会」による大江健三郎の講演「井伏さんの祈りとリアリズム」（『あいまいな日本の私』岩波新書刊・収録）が福山市市民会館ホールで行われる。

一九九五（平成七）年

一月、「井伏鱒二の世界」展（十～三十日）が、NHK広島放送センター・メディアプラザで開催される。NHK・ETV特集「ワシガ故郷ハハルカニ遠イ」がNHK教育テレビで放送される。

四月十六日、「名作をテレビで読む『山椒魚』」がNHK衛星第二テレビで放送される。「井伏鱒二展」（四月二十八日～七月）が、山梨県立文学館で開催される。大江健三郎の「井伏鱒二の世界」展での講演（平成六年十一月二十日）が、新潮カセットブック『井伏さんの祈り・私の祈り』として刊行される。

六月、三周忌を記す意をこめた『神屋宗湛の残した日記』が講談社より刊行される。『黒い雨』の新装版が新潮社より、新編『風貌・姿勢』（講談社文芸文庫）が講談社より刊行される。

七月、甲州で、井伏鱒二夫人を囲む「幸富講」の会が開かれる。

十一月十九日、碑文「勸酒」の「井伏鱒二文学碑」が、生家に程近い福山市加茂町粟根四川の谷間に建てられる。

一九九六（平成八）年

二月、『花の町・軍歌「戦友」』（講談社文芸文庫）が講談社より刊行される。

七月、『徴用中のこと』が講談社より刊行される。

八月、『井伏鱒二 対談集』（新潮文庫）が新潮社より刊行される。

十月、『仕事部屋』（講談社文芸文庫）が講談社より刊行される。

〔敬称省略〕

井伏鱒二年譜 參考資料

(一七八)

『筑摩書房現代文学体系44』（筑摩書房、昭和五十一年五月）所収年譜、米田清一。「図説・井伏鱒二」（有峰書店新社、昭和六十年五月）所収年譜、涌田佑。「井伏素老略伝」寺横武夫（『太宰治・井伏鱒二特集』掲載・平成四年六月、洋々社刊）。「井伏鱒二著作年表稿」前田貞昭（『近代文学雑誌』掲載・平成六年一月、他）。「現代日本文芸総覧」小田切進編（大空社、平成四年二月十八日）。